山形県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

五百刈遺跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター
6-1995-1174-01

1994

1995
1174
6

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

五百刈遺跡

発掘調査報告書

蔵書
'95.10.19
財団法人
山形県埋蔵文化財センター
1995－1174

平成６年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

本調査区発掘調査状況

ＳＫ74土壙遺物出土状況

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、五百刈遺跡の調査成果をまとめたものです。

五百刈遺跡は、山形県の北西部に位置する鶴岡市にあります。鶴岡市は西側を庄内砂丘、南側を朝日山地、西側を赤川に囲まれた情緒ある城下町です。

調査では、平安時代の建物跡と、その下から古墳時代の竪穴住居跡などが発見されました。今回の調査区域は五百刈遺跡の北端にあたりますが、出羽国の始まりを理解するうえでよい資料を得ることができました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成５年４月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成６年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　　言

1　本書は、県営ほ場整備事業下川地区に係る「五百刈遺跡」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査の要項は下記のとおりである。

遺 跡 名　五百刈遺跡（ＡＴＯＧＧ）　平成３年度登録

所 在 地　山形県鶴岡市大字下川字五百刈他

調査期間　発掘調査　平成５年４月１日～平成６年３月31日

現地調査　平成５年７月26日～平成５年８月25日　延べ20日間

調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・整理担当

調査研究課長　佐々木洋治

主任調査研究員　佐藤　庄一

嘱託職員　飯塚　稔

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部赤川土地改良事務所、鶴岡市教育委員会、西郷土地改良区等関係機関の協力を得た。現地調査と報告書作成に当って、吉田洋一（山形市立第六中学校教諭）氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は、佐藤庄一、飯塚稔が担当した。編集は安部実、伊藤邦弘が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。

6　遺物実測図のうち土師器の一部については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＡ：柱列　ＳＢ：建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土壙　ＳＴ：住居跡

ＳＸ：性格不明遺構　ＥＢ：柱穴　ＲＭ：金属製品　ＲＰ：一括土器　ＲＱ：石製品

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1)　遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2)　グリッドの南北軸は、Ｎ－21°58′－Ｅを測る。

(3)　遺構実測図は、1/40・1/60・1/200・1/500縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。

(4)　遺構計測表中の（ ）の数値は、検出部分の計測値を示している。

(5)　遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。

(6)　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

(7)　遺物観察表中の（ ）内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位で、Ｆは遺構覆土内出土、ローマ数字は（Ⅰ～Ⅴ）は遺跡を覆う土層（基準層序）を示している。

(8)　土師器実測中の網点は黒色化処理がなされている部分を示す。また、木製品実測中の網点は焼けている部分を示す。

(9)　遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過……1

2　調査の経過……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の自然環境……3

2　遺跡の歴史環境……3

Ⅲ　遺構と遺物

1　遺構の分布……5

2　古墳時代……8

3　平安時代……17

Ⅳ　ま　と　め

1　遺構について……25

2　遺物について……26

報告書抄録……27

表

表1　遺構観察表（1）……15

表2　遺物観察表（1）……16

表3　遺構観察表（2）……23

表4　遺物観察表（2）……24

挿　　図

第1図　遺跡周辺低地の微地形分類……2

第2図　調査区概要図……4

第3図　中央土層断面図……5

第4図　遺構配置図（本調査区）……6

第5図　遺構配置図(排水路地区)……7

第6図　ＳＴ36・49住居跡……9

第7図　ＳＴ66・70住居跡……11

第8図　落ち込み遺構……12

第9図　古墳時代等遺物（1）……13

第10図　古墳時代等遺物（2）……14

第11図　ＳＢ34建物跡平面図……18

第12図　ＳＢ39建物跡平面図……19

第13図　溝跡・土壙……20

第14図　歴史時代遺物（1）……21

第15図　歴史時代遺物（2）……22

図　　版

巻頭図版　本調査区発掘調査状況

ＳＫ74土壙遺物出土状況

図版1　発掘調査前の状況

本調査区発掘調査状況

図版2　ＳＴ36住居跡近景

ＳＤ72溝跡近景

ＳＸ48遺物出土状況

ＳＫ74遺物出土状況

ＳＴ49住居跡

図版3　ＳＴ49住居跡全景

ＳＴ70住居跡全景

図版4　東壁土層断面

中央土層断面

南壁土層断面

図版5　古墳時代等出土遺物（1）

図版6　古墳時代等出土遺物（2）

図版7　ＳＢ39建物跡全景

ＳＢ34・39建物跡遠景

図版8　ＳＤ40大溝断面

ＳＤ50大溝断面

ＳＤ1溝跡遺物出土状況

ＳＤ1溝跡土器出土状況

排水路立合地区全景

図版9　歴史時代出土遺物（1）

図版10　歴史時代出土遺物（2）

I　調査の経緯

1　調査に至る経過

鶴岡西部地区遺跡群の確認は、昭和31年頃に行われた暗渠管の埋設工事や水田の盤下げ工事等を契機とした、古墳時代の集落跡である清水新田遺跡、矢馳Ａ・Ｂ遺跡、山田遺跡等の発見に始まる。

昭和62年度から、これら遺跡群を含む一帯に県営ほ場整備事業（鶴岡西部地区）が実施され、矢馳Ａ・Ｂ遺跡、清水新田遺跡等の緊急発掘調査が行われ、庄内地方唯一の古墳である菱津古墳に関連する遺跡として貴重な存在となった。

五百刈遺跡も、県営ほ盤整備事業（鶴岡下川地区）の事業に伴い、山形県教育委員会が平成３年度に行った遺跡詳細分布調査によって新たに発見、登録された遺跡である。

下川地区には５カ所の遺跡が発見されたため、当初は下川１遺跡と命名されたが、平成５年度から小字名をとって「五百刈遺跡」と改められた。

遺跡の範囲は東西490m、南北400mの広大な地域に広がるが、県営ほ場整備事業が五百刈遺跡にかかることになり、平成３年度の試掘調査の内容をもとに関係機関と協議を重ねた結果、止むを得ず削平される遺跡北端の畑地部分について、今年度財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査することになり、平成５年７月26日～同年８月25日までの期間（調査日数20日間）で緊急発掘調査を実施することになった。

遺跡の南側については、今後県の農林水産部と協議をしながら保存していくことになる。

2　調査の経過

調査は遺跡北端の畑地を中心に東西20m、南北50mの1,000平方mについて実施し、中央の土層観察畦を基準にして、北地区と南地区の２つに分けて行った。以後これを本調査区と呼ぶことにする。

また、本調査区の南方60mのところに、東西方向の排水路が新しく設置されることとなったため、この地域に長さ90m、幅２m（約180平方m）についても、調査の始めにあわせて発掘調査を実施した。これを排水路地区と呼ぶ。

現地調査は、重機による粗掘を本調査区では７月27日～30日の４日間、排水路地区では７月27日に実施したのち、２m単位のグリットを設定し、手掘りで面整理を進めた。

遺構の検出作業は８月２日から行い、予想された平安時代遺構の検出と遺構実測図の作成にあたったが、Ⅲａ層灰黒色粘質シルトの更に下面から、古墳時代の遺構と遺物を８月12日に検出したため、本調査区での再点検と遺構の精査を行った。

今回の調査では竪穴住居跡（ＳＴ）４棟、建物跡（ＳＢ）３棟、溝跡（ＳＤ）24条を検出し、写真や図面に記録した。

調査説明会は関係者を含む51名を迎えて８月20日に開催した。８月25日遺構平面図の完了を最後に現地調査を終了し、器材の撤収を行った。

第１図　遺跡周辺低地の微地形分類（1：25,000）

II　遺跡の立地と環境

1　遺跡の自然環境

五百刈遺跡は庄内地方の月山、鳥海山などを主峰とする出羽丘陵の西に展開する沖積平野にあって、北西に庄内砂丘をへだてて日本海にのぞみ、西方に高館山地、南方に金峰山地とに囲まれた標高約10mの河間低地に立地し、南から東側を大山川が北流している。

現在みられる付近の地形は、一部の畑地を残して平坦なものとなっているが、かつては大山川などの流路変遷と共に幾筋もの微高地が形成されていたと推測される。歴史時代以降の土地の平坦化が進められる以前には、微高地と低湿地が入り組んだ複雑な地形が形成されており、当時の人々の生活の営みは水害と稲作との関係の中で、微高地に集落を形成し、低湿地に稲作を営んだものと仮定すると、当時の地形分類が必要になる。

第１図は空中写真における色調の差に着目し、色調の明るい部分を予察的に微高地、暗色の部分を後背湿地として分類を試みたものである。これは、最初の段階で行われたトレンチ調査や一昨年度の遺跡分布調査、さらには五百刈現地調査の結果を下に、地山の高さや状態、砂層の分布状況等から裏付けが可能であった。

第１図「遺跡周辺低地の微地形分類」によって、今後遺跡の集落は南東に伸びるものと考察される。

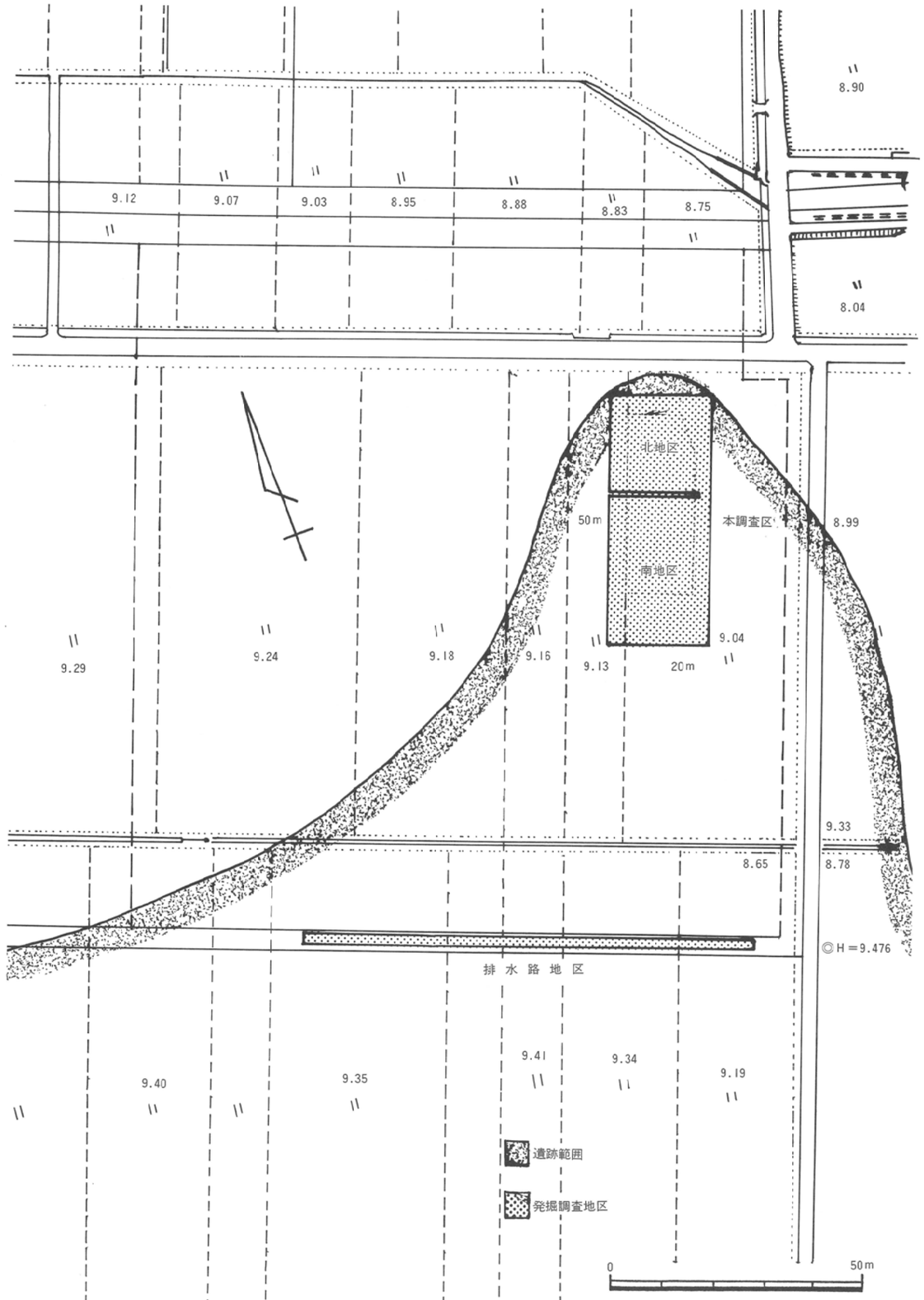
2　遺跡の歴史環境

庄内地方でこれまでに確認された古墳時代の遺跡は、古墳・集落跡・包蔵地その他単発的で内容不祥なものを含めて10数箇所の遺跡が確認されているが、これらの半数以上が今回調査の対象となった五百刈遺跡と同じ西田川郡域に存在している。

つまり、庄内地方でこれまで確認された古墳時代遺跡の大半が、庄内平野を二分する最上川の南半分（川南地区）の田川郡域、とりわけ鶴岡市の西南部や藤島町東南部等に集中している分布状況は、古墳時代の庄内ひいてはその後の出羽郡から出羽国の成立過程を考える上で非常に示唆的であり重要な事と受け止められる。加えて、今の所では庄内に唯一と考えられる古墳時代後期初頭の古墳で「変形長持形組合式石棺」等の形態から６世紀前半代の年代が考定される菱津古墳が同一地区に存在する事も看過できない。すなわち、こうした古墳の存在は、当地にあつても当時の趨勢に違わぬ古墳文化の開花が生産力の向上と集落群の発展他を背景として培われた結果と評価できるからである。

さらには、五百刈遺跡に隣接する下川地区の遺跡群「西ノ川遺跡」「西谷地遺跡」「西田面遺跡」および「中野遺跡」「畑田遺跡」「矢馳Ａ遺跡」「助作遺跡」「矢馳Ｂ遺跡」「清水新田遺跡」等の存在は、和銅２年（709）『続日本紀』にあらわれる「出羽柵」の置かれた場所ないし背景地としては現段階で鶴岡西部地区が最有力であることを予感させる。

また、排水路地区から出土した墨書土器２点に「岐」の記名があり都沙羅柵（斉明天皇４年658）との関係を注目する必要がある。



第２図　調査区概要図（１/1,000）

III　遺構と遺物

1　遺構の分布

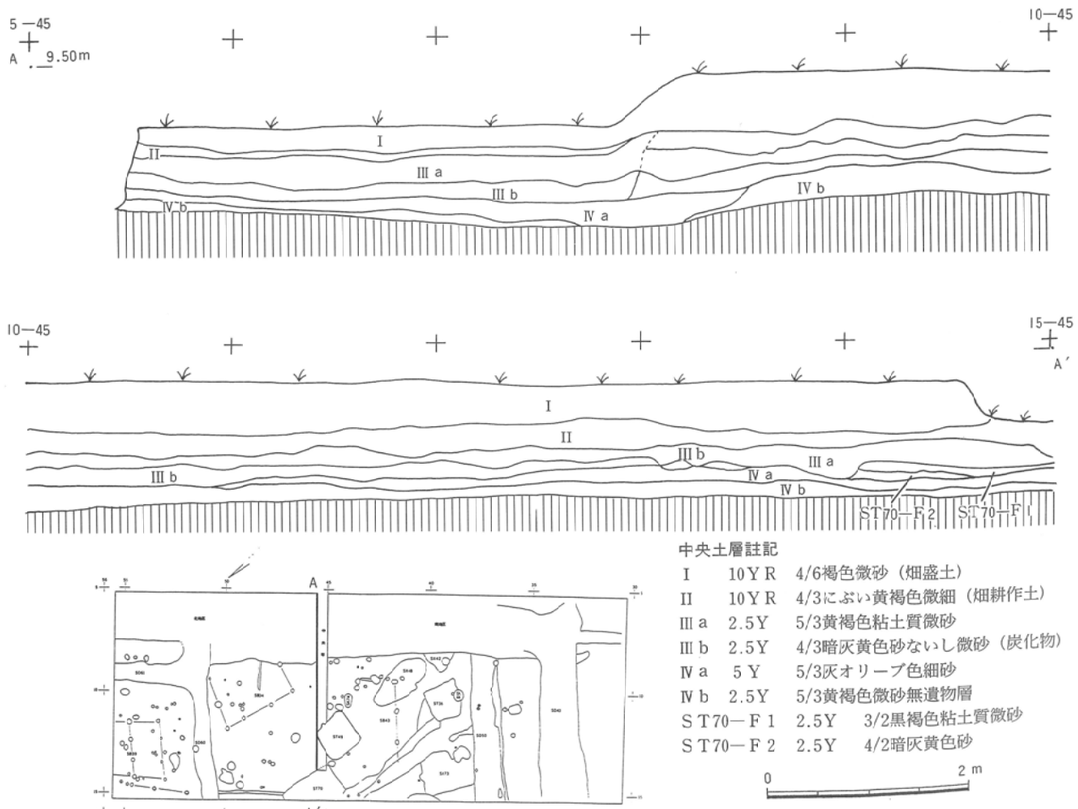
昔の人々が、大地に刻み込んだ生活の跡や構築物を遺構という。住居跡や建物跡・溝跡などがこれにあたり、今回の調査では、竪穴住居跡が確実なもので４棟、掘立柱建物跡が３棟、溝跡が25条、土壙13基等が検出された。

遺構の保存を図るため、現状で畑地になっている高台を主に発掘調査を実施したことにより、部分的な検出に終わっている遺構も多い。

古墳時代の遺構は、地盤が良い本調査区の中央部西に集中して検出された。４棟の竪穴住居跡は、平面形が隅丸方形を呈し、大きさは３～５m四方を測る。主軸方向はＳＴ66住居跡を除き、ほぼ同じ方向である。住居跡とほぼ同じ時期の土壙や溝跡も周囲にいくつか検出されている。とくにＳＫ44とＳＫ74号土壙からは、古墳時代の土器がまとまって出土している。

掘立柱建物跡は、本調査区北側、畑地の縁辺部に３棟検出された。ＳＢ39建物跡はＳＤ60・61大溝と向きを同じくし、相互に関連するものと考えられる。

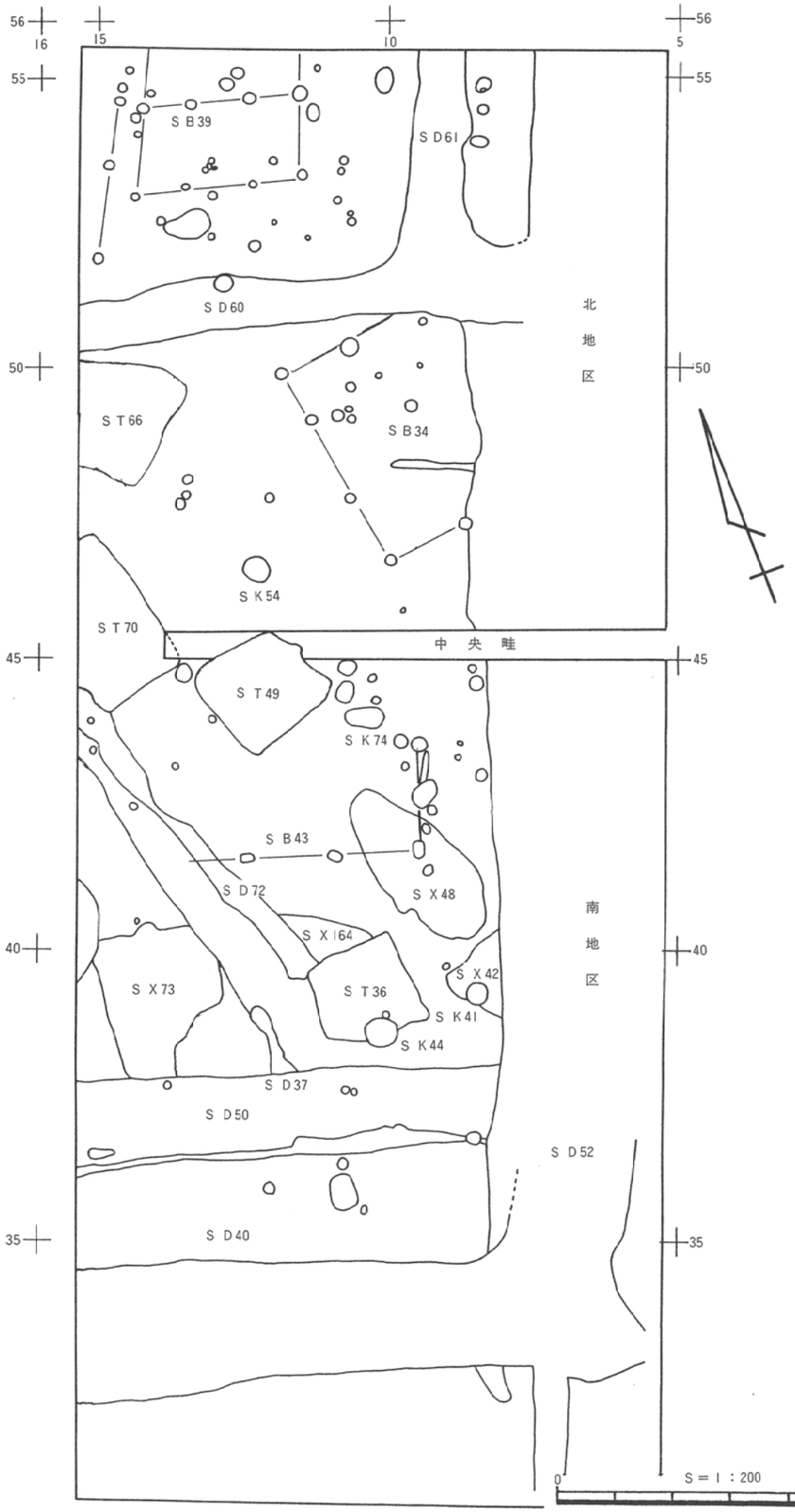
このほか排水路地区から、平安時代の溝跡16条と土壙５基等が検出されている。遺構は排水路地区の東半に多く認められ、本調査区とほぼ南北線上に並ぶ。



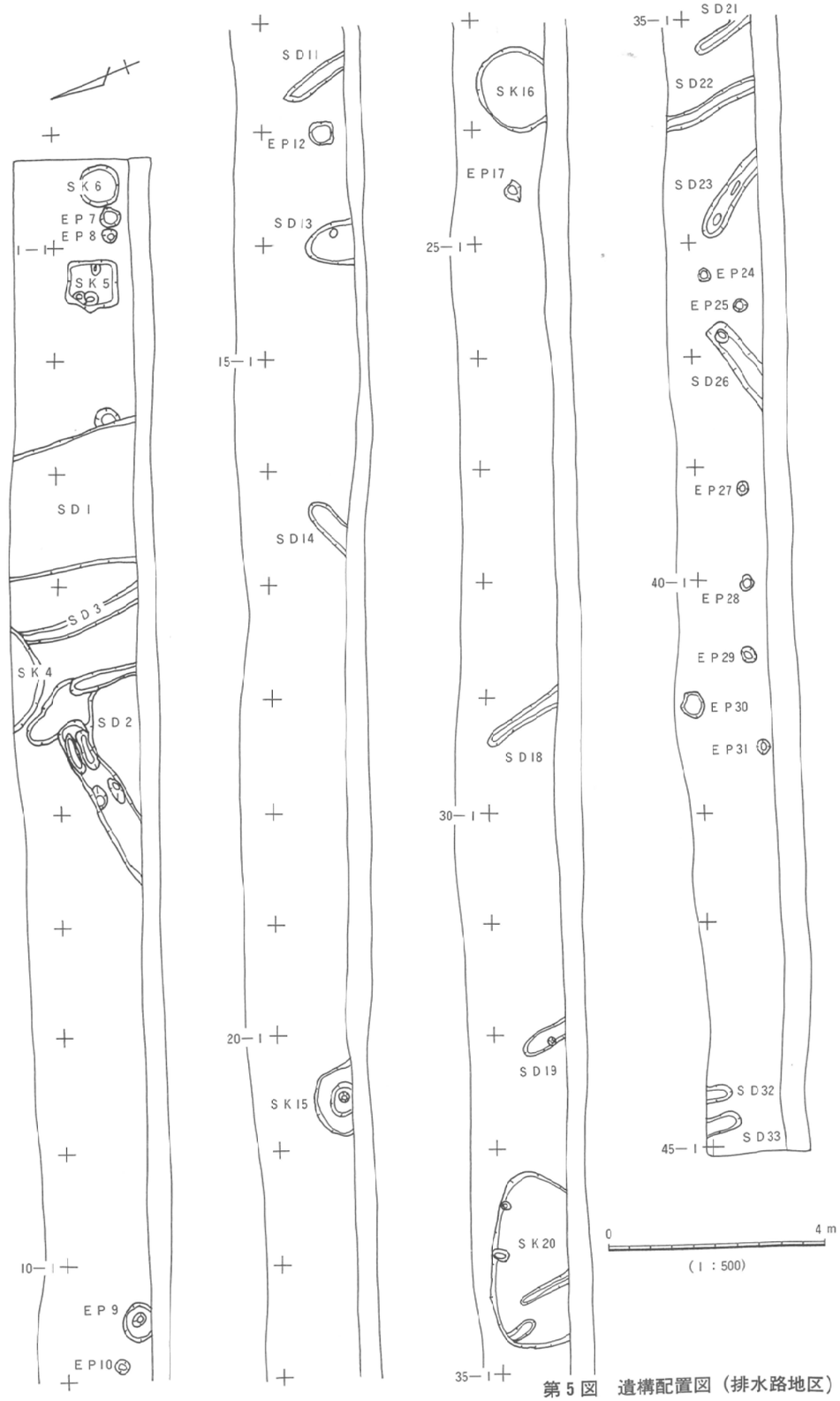
中央土層註記

I	10YR	4/6褐色微砂	（畑盛土）
II	10YR	4/3にぶい黄褐色微細	（畑耕作土）
III a	2.5Y	5/3黄褐色粘土質微砂	
III b	2.5Y	4/3暗灰黄色砂ないし微砂	（炭化物）
IV a	5Y	5/3灰オリーブ色細砂	
IV b	2.5Y	5/3黄褐色微砂無遺物層	
ST70—F1	2.5Y	3/2黒褐色粘土質微砂	
ST70—F2	2.5Y	4/2暗灰黄色砂	

第３図　中央土層断面図



第 4 図　遺構配置図（本調査区）



第 5 図　遺構配置図（排水路地区）

2　古墳時代

本節では、IVａ層下部で検出された古墳時代に属する遺構とその出土遺物について、竪穴住居跡、落ち込み遺構、土壙、溝跡の順に説明する。

(1)　ＳＴ36住居跡・ＳＸ164落ち込み（第６図、図版２）

ＳＴ36住居跡は本調査区中央南寄り10～12－39～41Ｇで検出された不整方形の住居跡である。北側がＳＤ72溝跡とＳＸ164落ち込みを切っており、南側がＳＸ44土壙によって切られている。大きさは南北径3.42m、東西径3.56mを測る。遺構確認面はIVｂ層上面である。壁の上面から床面までの高さは最大部で17cmである。

柱穴は３個検出されている。床面はほぼ平坦であるが、東南になだらかに傾斜する。炉跡やカマドは認められない。

覆土は４層に分かれ、Ｆ１・２に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕（第９図19、第10図７）、同壺、鉢、内面が黒色化処理された（以下内黒と呼ぶ）坏、高台坏がある。Ｆ１から多く出土するが、いずれも細片で器形が復元出来るものはない。とくに体部上位に段を有する内黒坏が目立つ。

ＳＸ164落ち込みは、大きさが南北径1.22m以上、東西径3.05m以上を測る。覆土は２層に分かれ、遺物はＦ２から土師器甕、同内黒坏、高台坏（第９図17）が出土している。

(2)　ＳＴ49住居跡（第６図、図版２・３）

本調査区中央南寄り12～14－44～46Ｇで検出された不整方形の住居跡である。当初西壁が溝状に検出され、その後の精査によって全体プランが確認されたものである。大きさは南北径3.78m、東西3.45mを測る。遺構確認面はIVｂ層下面である。壁の上面から床面までの高さは最大部で15cmである。

柱穴は11個検出されているが、４本柱を基本とするものと思われる。床面はほぼ平坦である。炉跡やカマドは認められない。

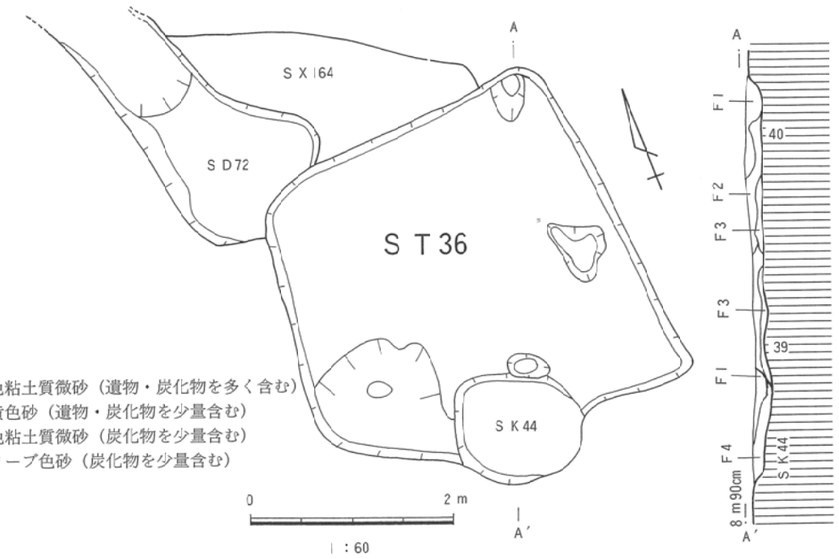
覆土は４層に分かれ、Ｆ２～４に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕、同壺、鉢、内黒坏(第９図10)、高台坏がある。Ｆ２から多く出土するが、いずれも細片で器形が復元出来るものはない。坏には内面にミガキ調整が施され、黒色化処理がないものもある。

(3)　ＳＴ66住居跡（第７図）

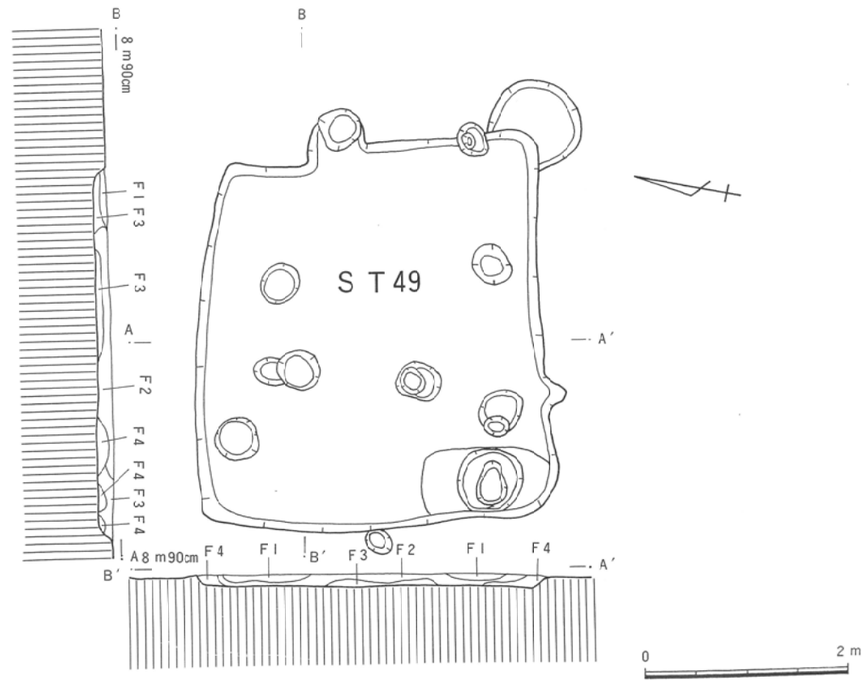
本調査区中央西壁沿い14～16－49～51Ｇで検出された不整方形の住居跡である。西側が未調査となっているため、全体のプランは不明である。大きさは南北径4.34m、東西径3.70m以上を測る。遺構確認面はIVｂ層下面である。壁の上面から床面までの高さは最大部で12cmと浅い。

柱穴は６個検出されている。床面はほぼ平坦で、炉跡やカマドは認められない。

覆土は２層に分かれ、Ｆ１・２に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕（第９図16、第10図３・４・６）、同壺、鉢、内黒坏（第９図３・11）がある。Ｆ１から多く出土するが、いずれも細片で器形が復元出来るものはない。甕には内面にミガキ調整が施され、黒色化処理が施されているものもある。



ＳＴ36土層註記
Ｆ１　2.5Y　3/2黒褐色粘土質微砂（遺物・炭化物を多く含む）
Ｆ２　2.5Y　4/2暗灰黄色砂（遺物・炭化物を少量含む）
Ｆ３　2.5Y　5/3黄褐色粘土質微砂（炭化物を少量含む）
Ｆ４　5ＧＹ　4/1暗オリーブ色砂（炭化物を少量含む）



ＳＴ49土層註記
Ｆ１　2.5Y　5/3黄褐色粘土質微砂（無遺物層）
Ｆ２　2.5Y　3/2黒褐色粘土質微砂（遺物・炭化物を多く含む）
Ｆ３　2.5Y　4/2暗灰黄色砂（遺物・炭化物を少量含む）
Ｆ４　2.5Y　5/2暗灰黄色微砂（遺物・炭化物を少量含む）

第６図　ＳＴ36・49住居跡

(4)　ＳＴ70住居跡（第７図、図版３）

本調査区中央西壁沿い14～16－45～48Ｇで検出された不整長方形の住居跡である。西側が未調査となっているため、全体のプランは不明である。大きさは南北径5.51m、東西径3.64m以上を測る。遺構確認面はⅣｂ層下面である。壁の上面から床面までの高さは最大部で13cmである。

柱穴は４個検出されている。床面は南壁沿いがやや落ち込むが、それ以外はほぼ平坦である。炉跡やカマドは認められない。

覆土は２層に分かれ、Ｆ１・２に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕（第10図２）同壺、鉢、内黒坏、坏（第９図14・20）がある。Ｆ１から多く出土するが、いずれも細片で器形が復元出来るものはない。高台坏には内面にミガキ調整が施され、黒色化処理がないものもある。

(5)　ＳＸ42・48落ち込み（第８図、図版２）

本調査区中央南寄り９～11－39～43Ｇで検出された長楕円形および方形の落ち込み遺構である。遺構確認面はⅣｂ層下面である。

ＳＫ42の大きさは南北径2.45m以上、東西2.47m以上を測る。壁の上面から床面までの高さは最大部で10cmである。

覆土は２層に分かれ、Ｆ２に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕、同内黒坏、高台坏等がある。

ＳＸ48の大きさは南北径6.37m、東西径2.95mを測る。壁の上面から床面までの高さは最大部で14cmである。

覆土は３層に分かれ、Ｆ２・３に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕（第10図８・10）、同壺、鉢、内黒坏（第９図２）、高台坏（第９図15･18･21）、石製紡錘車（第10図12）がある。Ｆ２から多く出土し、古墳時代の遺構の中ではまとまった個体が出土している。

(6)　ＳＸ73落ち込み（第８図、図版２）

本調査区中央西南寄り13～15－38～41Ｇで検出された不整方形の落ち込み遺構である。大きさは南北径5.00m以上、東西径3.96mを測る。壁の上面から床面までの高さは最大部で17cmである。遺構確認面はⅣｂ層下面である。

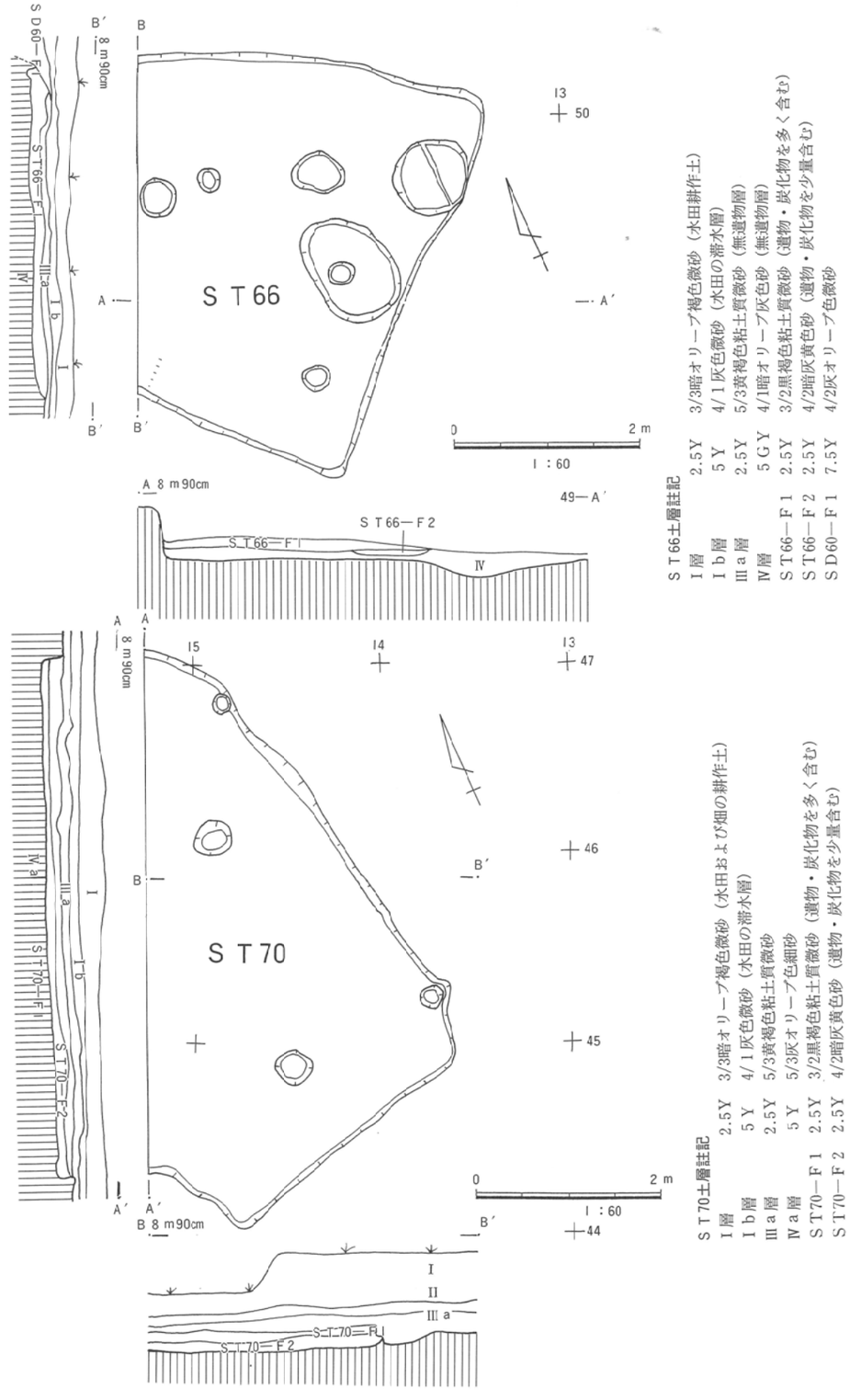
覆土は２層に分かれ、Ｆ１・２に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕、同壺、鉢(第10図10)、内黒坏、高台坏、土製玉（第10図13）がある。Ｆ１から多く出土する。

(7)　ＳＫ41・44土壙（第６・８図、図版２）

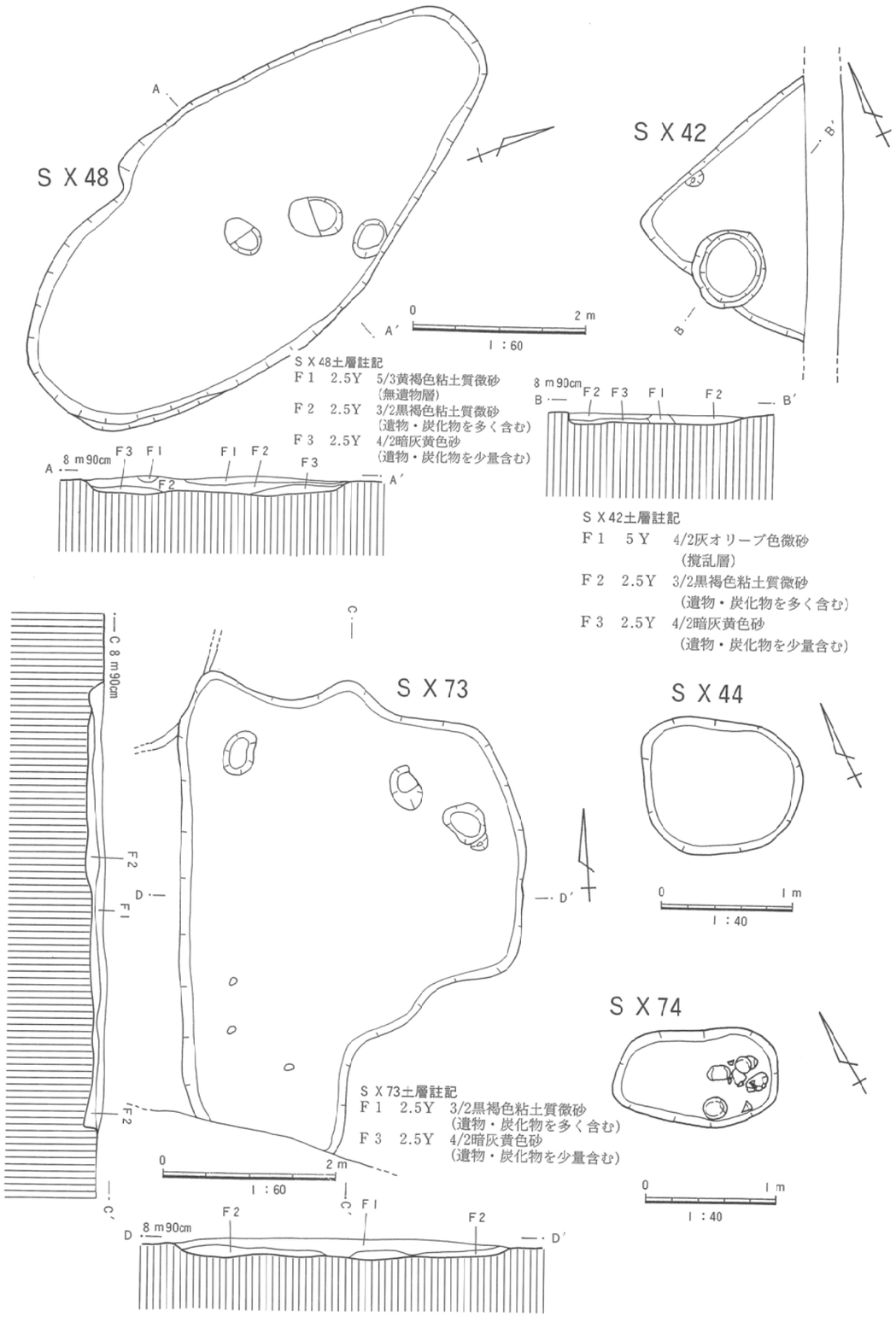
本調査区中央南寄り９～11－39～40Ｇで検出された円形の土壙である。遺構確認面はⅣｂ層下面である。

ＳＫ41土壙は、ＳＸ42落ち込みを切り込んで作られている土壙で、大きさは南北径0.71m、東西径0.69mを測る。覆土は２層に分かれ、各層に遺物と炭化物を含む。遺物は土師器甕、同内黒坏等がある。

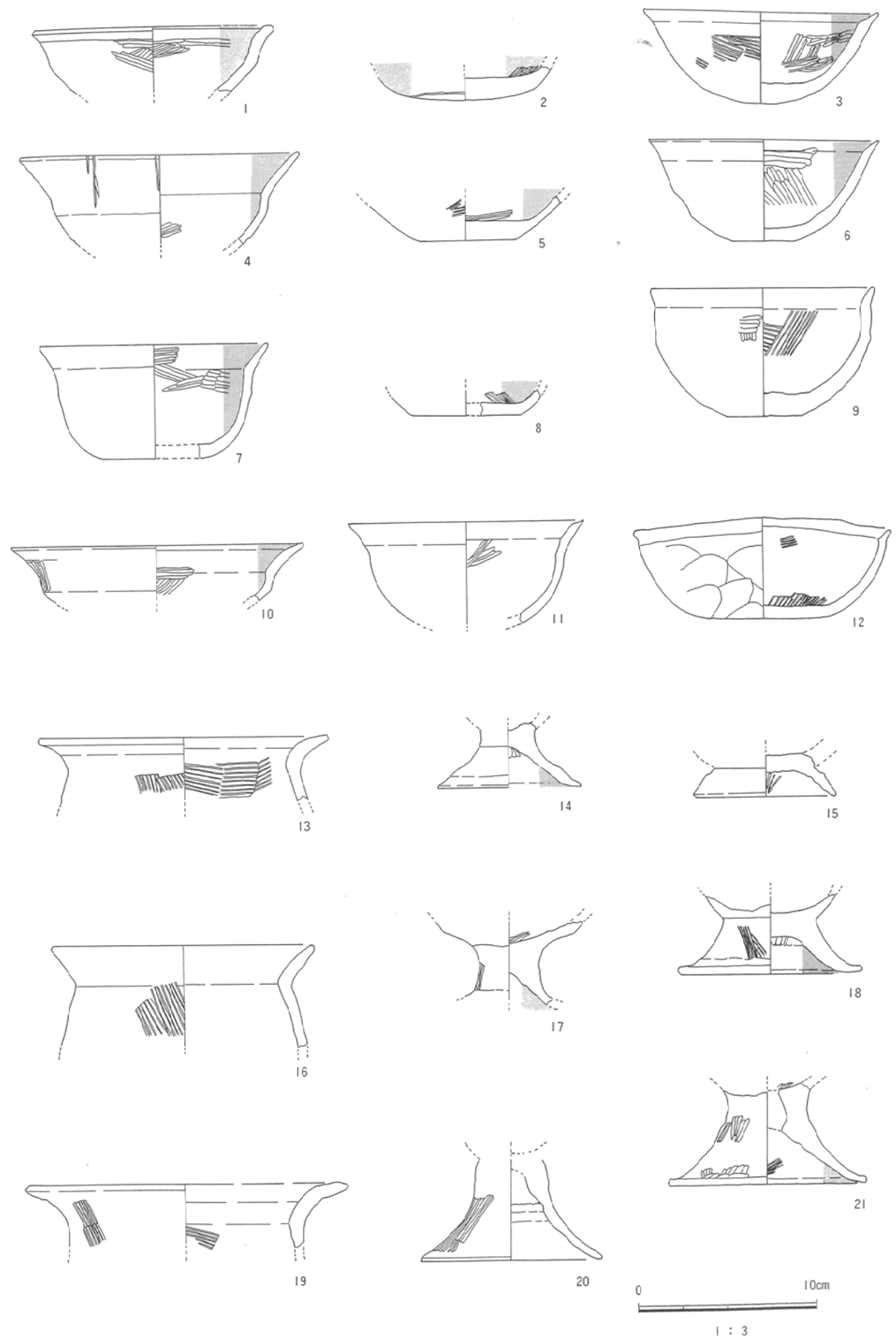
ＳＫ44土壙は、ＳＴ36住居跡を切り込んで作られている土壙で、大きさは南北径1.52m



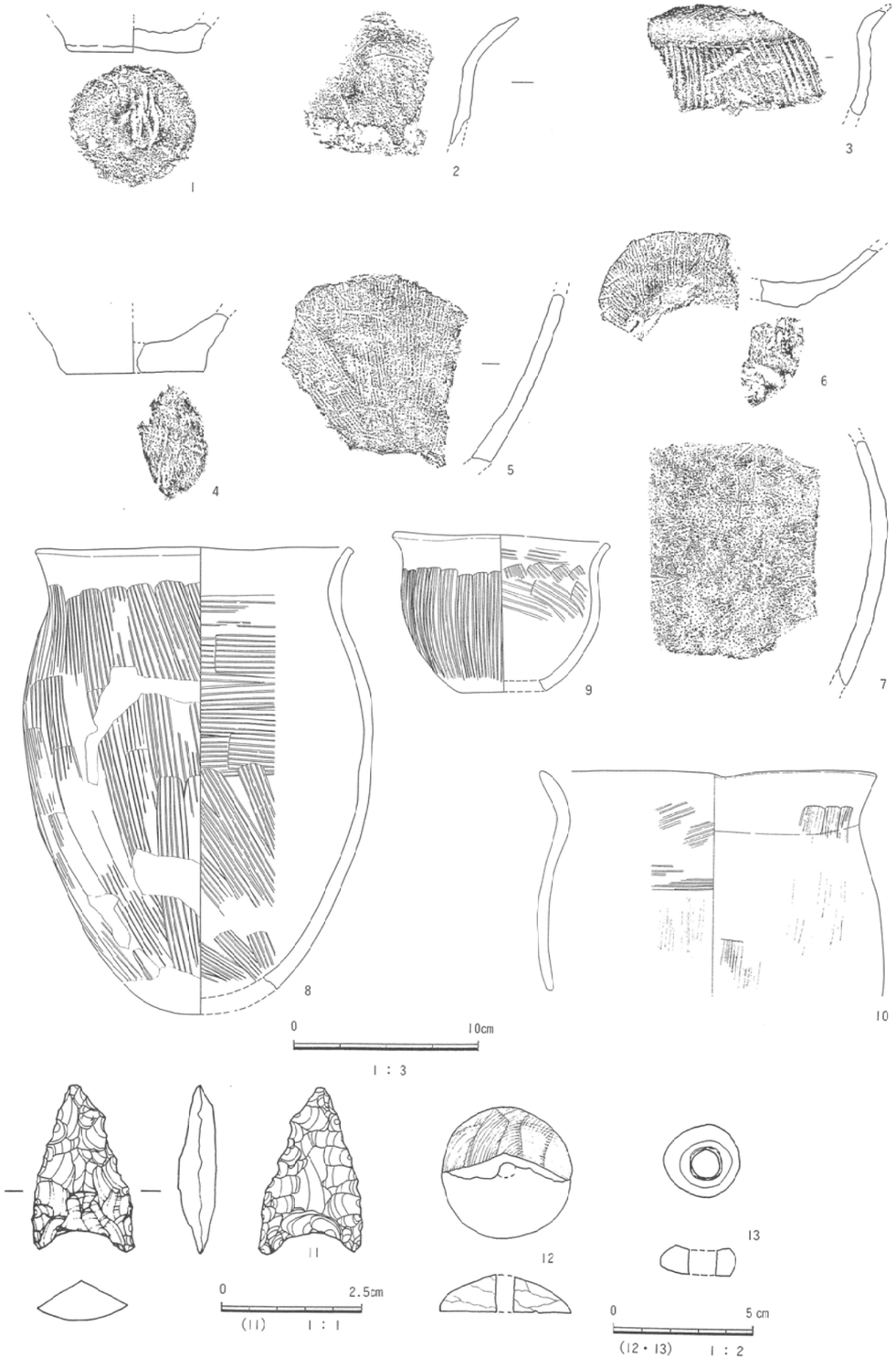
第７図　ＳＴ66・70住居跡



第 8 図　落ち込み遺構



第 9 図　古墳時代等遺物(1)



第10図　古墳時代等遺物(2)

東西径1.82mを測る。覆土は2層に分かれ、各層に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕、同内黒坏等がある。

(8)　ＳＫ54・74土壙（第8図、巻頭図版、図版2）

ＳＫ54土壙は、本調査区中央西寄り13－47Ｇで検出された不整円形の土壙で、大きさは南北径0.98m、東西径0.88mを測る。覆土は2層に分かれ、各層に遺物と炭化物を含む。遺物は、土師器甕、同内黒坏等がある。

ＳＫ74土壙は、ＳＴ36住居跡を切り込んで作られている土壙で、大きさは南北径1.12m、東西径1.92mを測る。

覆土は黒褐色粘質微砂の単一土層で、遺物はほぼ完形の坏が7個体まとまって発見された。坏には内黒のものと非内黒のものとがある（第9図5～9・12)。

(9)　ＳＤ37・72溝跡（図版2）

本調査区中央西寄り12～15－39～44Ｇで検出された細長い溝跡である。遺構確認面は住居跡等と同じⅣｂ層下面である。

ＳＤ37溝跡は、南側がＳＤ50大溝に切られている溝跡で、大きさは幅0.50m、南北長さ2.65mを測る。覆土は単一土層で、土師器甕、同坏（第9図1）等が出土している。

ＳＤ72溝跡は、ＳＸ73落ち込みを切り込んで作られており、大きさは幅0.90m、南北長さ10.90m以上を測る。覆土から土師器甕、壺、内黒坏等が出土している。

表1　遺構観察表(1)

遺構番号	種別	検出地区(X－Y)G他	平面(断面)形	主軸方位	規模 (NS×EW)m	備考
ＳＴ 36	住居跡	(10～12－39～41)G	不整方形	N－2°50'－W	3.42×3.56	ＳＤ72、ＳＸ164を切る 第6図
ＳＤ 37	溝跡	(11・12－38・39)G	(U字形)	N－10°20'－W	2.65×0.50	
ＳＫ 41	土壙	(9－40)G	円形		0.71×0.69	ＳＸ42を切る
ＳＸ 42	落ち込み	(9－39～41)G	方形	N－22°10'－W	(2.45)×(2.47)	ＳＫ41に切られる 第8図
ＳＫ 44	土壙	(10・11－39)G	円形		1.52×1.82	ＳＴ36を切る　第8図
ＳＸ 48	落ち込み	(9～11－41～43)G	長楕円		6.37×2.95	第8図
ＳＴ 49	住居跡	(12～14－44～46)G	不整方形	N－6°20'－W	3.78×3.45	第6図
ＳＫ 54	土壙	(13－47)G	不整円形		0.98×0.88	
ＳＴ 66	住居跡	(14～16－49～51)G	不整方形	N－43°10'－E	4.34×(3.70)	第7図
ＳＴ 70	住居跡	(14～16－45～48)G	不整長方形	N－14°50'－W	5.51×(3.64)	第6図
ＳＤ 72	溝跡	(12～15－39～44)G	(逆台形)	N－21°10'－W	(10.12)×(0.90)	第6図
ＳＸ 73	落ち込み	(13～15－38～41)G	不整方形	N－4°10'－E	(5.00)×3.96	ＳＴ36に切られる 第8図
ＳＫ 74	土壙	(11－44・45)G	楕円形		1.12×1.92	第8図
ＳＸ164	落ち込み	(11・12－40・41)G	方形？	N－12°00'－E	(1.22)×(3.05)	ＳＴ36に切られる 第6図

表２　遺物観察表（１）

挿図番号	図版頁	器種	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	底部形態	分類	備考
9-1	5	土師器坏	ＳＤ37－Ｆ1	13.0		(3.6)	ミガキ	ミガキ→黒色化		ＡII	
9-2	5	土師器坏	ＳＸ48－Ｆ2	(9.6)		(1.6)	ミガキ→黒色化	ミガキ→黒色化	丸底	Ａ	
9-3	5	土師器坏	ＳＴ66－Ｆ	(13.0)		5.2	ハケ目	ミガキ→黒色化	丸底	ＡＩ	
9-4	5	土師器坏	ＳＤ61－Ｆ3	15.6		(5.0)		ミガキ→黒色化		ＡIII	
9-5	5	土師器坏	ＳＫ74－Ｆ	(10.6)	(5.0)		ハケ目	ミガキ→黒色化	小平底	Ａ	
9-6	5	土師器坏	ＳＫ74－Ｆ	12.8		5.6		ミガキ→黒色化		ＡIV	
9-7	5	土師器坏	ＳＫ74－Ｆ	12.8		6.3		ミガキ→黒色化		ＡＶ	
9-8	5	土師器坏	ＳＫ74－Ｆ	(8.2)	(5.8)	(1.3)		ミガキ→黒色化		Ａ	
9-9	5	土師器坏	ＳＫ74－Ｆ	12.4		7.1	ミガキ	ハケ目	小平底	ＡＶ	
9-10	5	土師器坏	ＳＴ49－Ｆ	(16.8)		(3.8)	ミガキ	ミガキ→黒色化		ＡIII	
9-11	5	土師器坏	ＳＴ66－Ｆ1	(11.0)		(5.6)		ミガキ		ＡII	
9-12	5	土師器坏	ＳＫ74－Ｆ	14.4	6.2	5.5	ケズリ	ハケ目	丸底	ＡIV	
9-13	5	土師器甕	ＳＸ43－Ｆ1	16.2		(3.6)	ハケ目	ハケ目		ＤＩ	
9-14	5	土師器高坏	ＳＴ70－Ｆ1	(8.0)		(3.5)	ミガキ	ミガキ→黒色化	高台付	ＢＩ	
9-15	5	土師器高坏	ＳＸ48－Ｆ2	(8.0)	(4.0)	(2.3)		シボリ	高台付	ＢIII	
9-16	5	土師器甕	ＳＴ66－Ｆ1	(14.6)		(5.5)	ハケ目			ＤII	
9-17	5	土師器高坏	ＳＸ164－Ｆ2	(8.2)		(4.0)	ミガキ	ミガキ→黒色化	高台付	ＢII	
9-18	5	土師器高坏	ＳＸ48－Ｆ2		10.2	(4.2)	ハケ目	ミガキ→黒色化		ＢＩ	
9-19	5	土師器甕	ＳＴ36－Ｆ1	(17.8)		(3.4)	ハケ目	ハケ目		ＤＩ	
9-20	5	土師器高坏	ＳＴ70－Ｆ3		(10)	(5.6)	ミガキ			ＢII	
9-21	5	土師器高坏	ＳＸ48－Ｆ2		(10.8)	(5.2)	ミガキ	ミガキ→黒色化	高台付	ＢII	
10-1	6	土師器甕	ＳＤ22－Ｆ1		6.7		ハケ目	ハケ目	平底	Ｄ	
10-2	6	土師器甕	ＳＴ70－Ｆ1				ハケ目	ハケ目		ＤII	
10-3	6	土師器甕	ＳＴ66－Ｆ1				ハケ目			ＤIII	
10-4	6	土師器甕	ＳＴ66－Ｆ1		7.4		ハケ目		平底	Ｄ	
10-5	6	土師器甕	ＳＴ36－Ｆ1				ハケ目	ハケ目		Ｄ	
10-6	6	土師器甕	ＳＴ65－Ｆ1		5.4		ハケ目	ハケ目	平底	Ｄ	
10-7	6	土師器甕	ＳＴ36－Ｆ				ハケ目	ハケ目		Ｄ	
10-8	6	土師器甕	ＳＸ48－Ｆ2	170		(250)	ハケ目	ハケ目	丸底	ＤIII	
10-9	6	土師器鉢	ＳＸ73－Ｆ1	115	(45)	86	ハケ目	ハケ目	平底	Ｃ	
10-10	6	土師器甕	ＳＸ48－Ｆ2	180		(127)	ハケ目	ナデ		ＤIII	
10-11	6	石鏃	ＳＤ1－Ｆ2	18		30	全面調整	全面調整			珪質頁岩製
10-12	6	石製紡錘車	ＳＸ48－Ｆ2	4.6		1.3	全面研磨	全面研磨			滑石製
10-13	6	土製丸玉	ＳＸ73－Ｆ1	2.7		1.0	削り	削り			

3　平安時代

(1)　排水路地区（第５・13図）

［位置・概観］調査区の南方60mの地点、０～２－０～46Ｇに位置し、長さ90m、幅２ｍの約180平方ｍを排水路地区として調査した。各種の覆土はオリーブ黒色の粘質微砂を主体とする土層で、溝跡（ＳＤ）を14条、土壙（ＳＫ）を６基、ピット（ＥＰ）を13個検出した。遺物は主に東側のＳＤ１・２溝跡および中央部分のＳＤ13溝跡（第14図９・10）から出土している。

ＳＤ１溝跡は排水路地区の０～２－３～４Ｇにあって、幅2.5mから2.2mを測り、北西から南東方向に延びる。深さは最深部約20cm、遺物包含層の厚さは約50cmで、溝跡一面に広がりをみせる。

［遺物］出土遺物としては須恵器高台坏（第16図１）、須恵器坏（同図２）、赤焼土器坏（同図３）、須恵器坏墨書「岐」（同図４）、須恵器坏（同図５）、須恵器蓋（同図６）、赤焼土器坏（同図７）、須恵器蓋（同図15）、銅製簪（第17図１）、石鏃（第10図11）等整理箱で１箱分が出土した。遺物の中では、「岐」の記名がある須恵器墨書土器が出土したことが注目に値する。「岐」の墨書土器は、包含層からもう１点（第14図11）出土している。

(2)　ＳＤ40、ＳＤ50大溝（第13図）

ＳＤ40は本調査区南地区の南側を東西に延びる溝跡で５～16－33～35Ｇで検出され、幅4.7mから４ｍを測る。深さは最深部で約90cm、覆土オリーブ黒色の粘質微砂を主体とした土層で、地層は第６層に細分され、第４層に有機物を多く含んだ地層がある。遺物は第１層から平安時代の須恵器・甕・赤焼土器坏などが少量出土している。

ＳＤ50は南地区の中央を東西に延びる溝跡で９～16－35～37Ｇで検出され幅3.5mから2.5mを測る。このＳＤ50に直交する形で北西からＳＤ37が流入する。また、このＳＤ１に重なる形で幅30cm～50cmの溝跡が検出されていることから、ＳＤ１は埋積を重ねることで溝幅を狭めながらその埋積を終えていることが分かる。

遺構の精査を幅２ｍでおこなったが、出土遺物は検出できなかった。

(3)　ＳＢ39建物跡、ＳＤ60・61大溝（第12図）

ＳＢ39は北地区の北西縁辺部12～16－53～56Ｇに位置する、３間×２間以上の掘立建物跡である。柱穴８個が確認され、柱穴の間隔は2.4m～3.0mで柱穴の延長は北に延びると思われる。中柱となる柱穴の存在を考慮すれば床敷きの建物跡ないし倉庫跡であったと推定される。建物は、柱穴掘り方から、平安時代の土師器や赤焼土器片が出土している。

ＳＤ60は８～16－51～52Ｇで検出され幅1.8m～1.6mで、上記ＳＢ39建物跡に平行する形で東西に延び、北から南に延びるＳＤ61に９－53Ｇで直交することからＳＢ建物跡と深く関わりあっていたものと考察される。遺物として須恵器甕（第14図17）や中世陶器壺（第15図８・９）、陶器の火箱（同図10）が出土した。

(4)　ＳＢ34建物跡（第11図）

北地区中央９～12－47～51Ｇに位置する。西側の柱穴群は３間分の検出がなされ柱間は

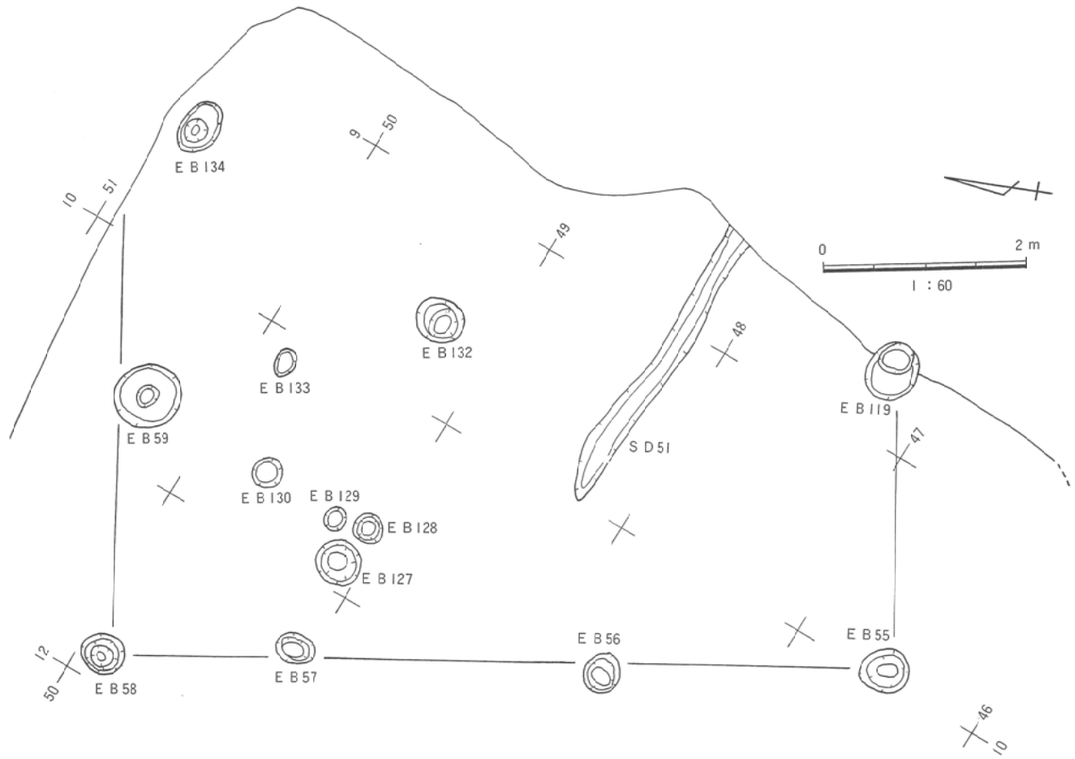
1.0m～2.8mで、北側に２間（柱間2.4m～2.5m）南側に１間（柱間３m）の検出をみたが、東面は水田耕作による削平部分で検出することができなかった。検出された７個の柱穴から平安時代の赤焼土器が出土しており同時代の掘立建物跡と推定することができる。

西面及び北面での検出測定からすると、建物跡の面積は7.8m×５mで約39平方mの広さを有する。

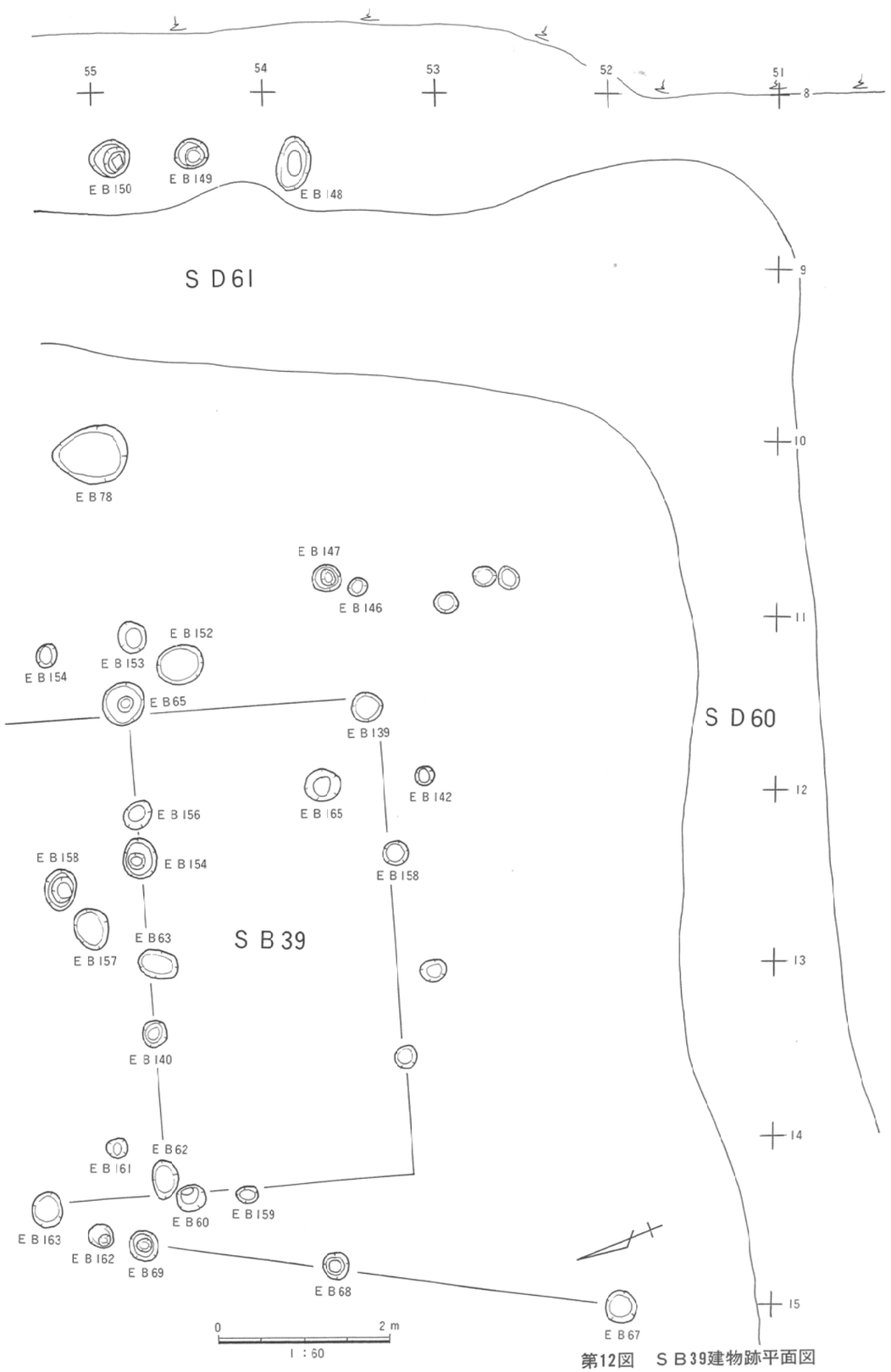
(5)　ＳＢ43建物跡

南地区中央12～15－53～56Ｇに位置し、５個の柱穴が1.8～3.6m間隔でＬ字形に検出されたことから、建物跡の一部と考えられる。他の柱列は北西から南東に延びるＳＤ72および東側にあるＳＸ43によって削平された部分とみなされ検出することはできなかった。柱穴が古墳時代の住居跡を掘り込んでおり覆土が上記ＳＢ39、およびＳＢ34の住居跡と同じことから平安時代の建物跡と推察した。

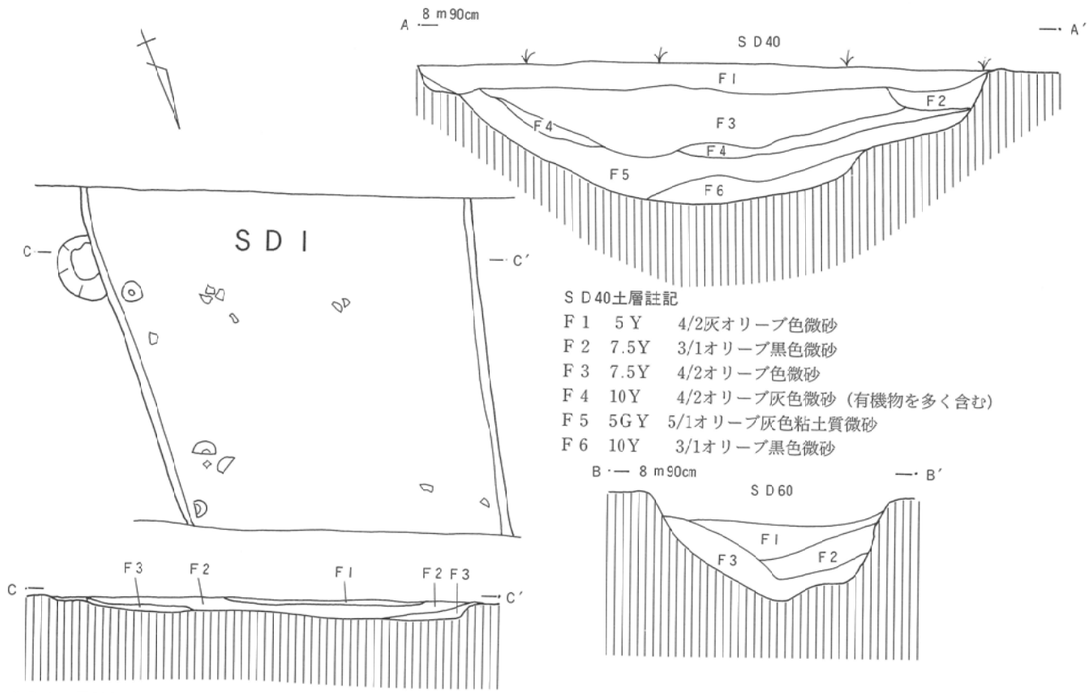
規模は柱穴の間隔から推定するに約９m×約６m（約54平方m）程度の住居跡と推定される。



第11図　ＳＢ34建物跡平面図



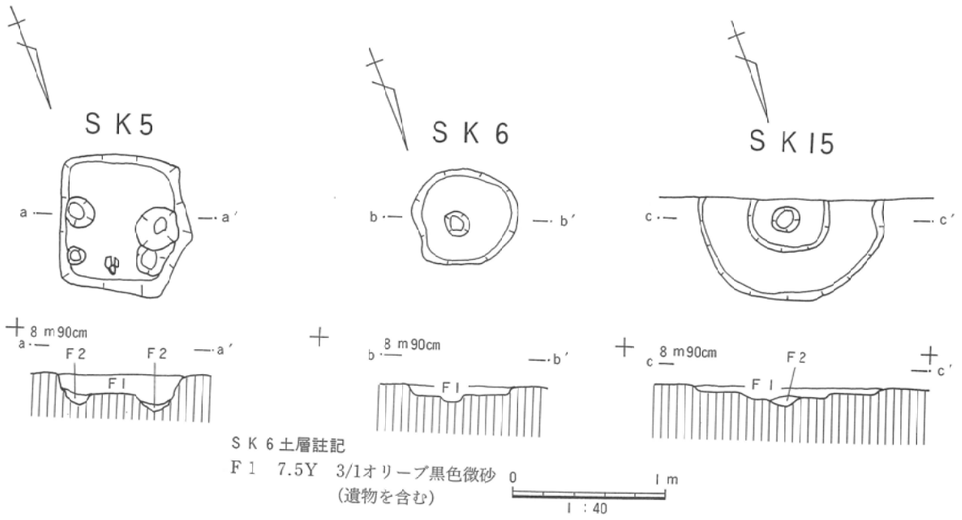
第12図　ＳＢ39建物跡平面図



S D40土層註記
F 1　5 Y　4/2灰オリーブ色微砂
F 2　7.5Y　3/1オリーブ黒色微砂
F 3　7.5Y　4/2オリーブ色微砂
F 4　10Y　4/2オリーブ灰色微砂（有機物を多く含む）
F 5　5GY　5/1オリーブ灰色粘土質微砂
F 6　10Y　3/1オリーブ黒色微砂

S D I 土層註記
F 1　10Y　3/1オリーブ黒色微砂（遺物を少量含む）
F 2　7.5Y　3/1オリーブ黒色微砂（遺物を多く含む）
F 3　7.5Y　3/2オリーブ黒色微砂（遺物を少量含む）

S D60土層註記
F 1　7.5Y　4/2灰オリーブ色微砂
F 2　10Y　4/2オリーブ灰色微砂（有機物を多く含む）
F 3　10Y　3/1オリーブ黒色微砂

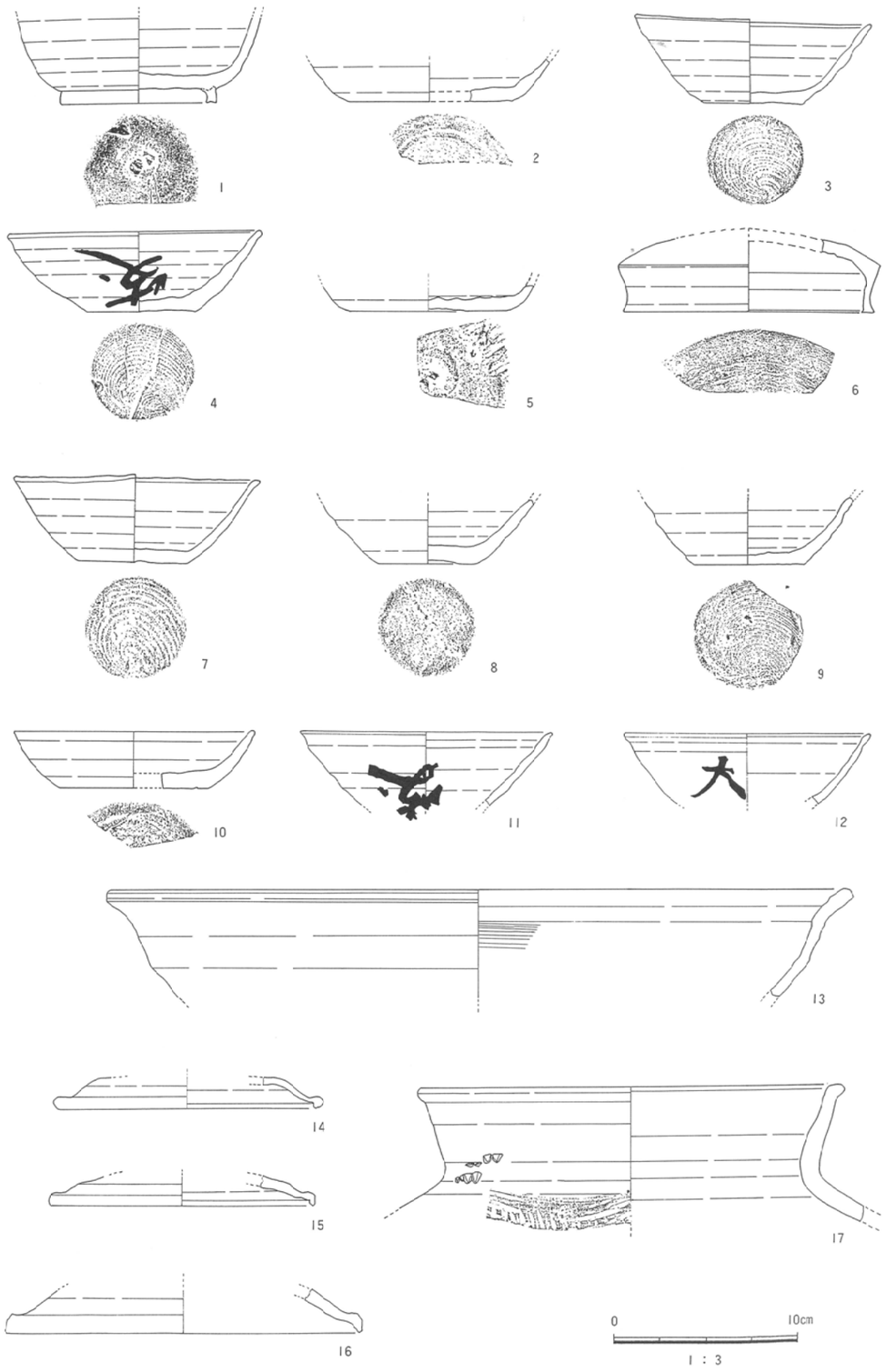


S K 6 土層註記
F 1　7.5Y　3/1オリーブ黒色微砂（遺物を含む）

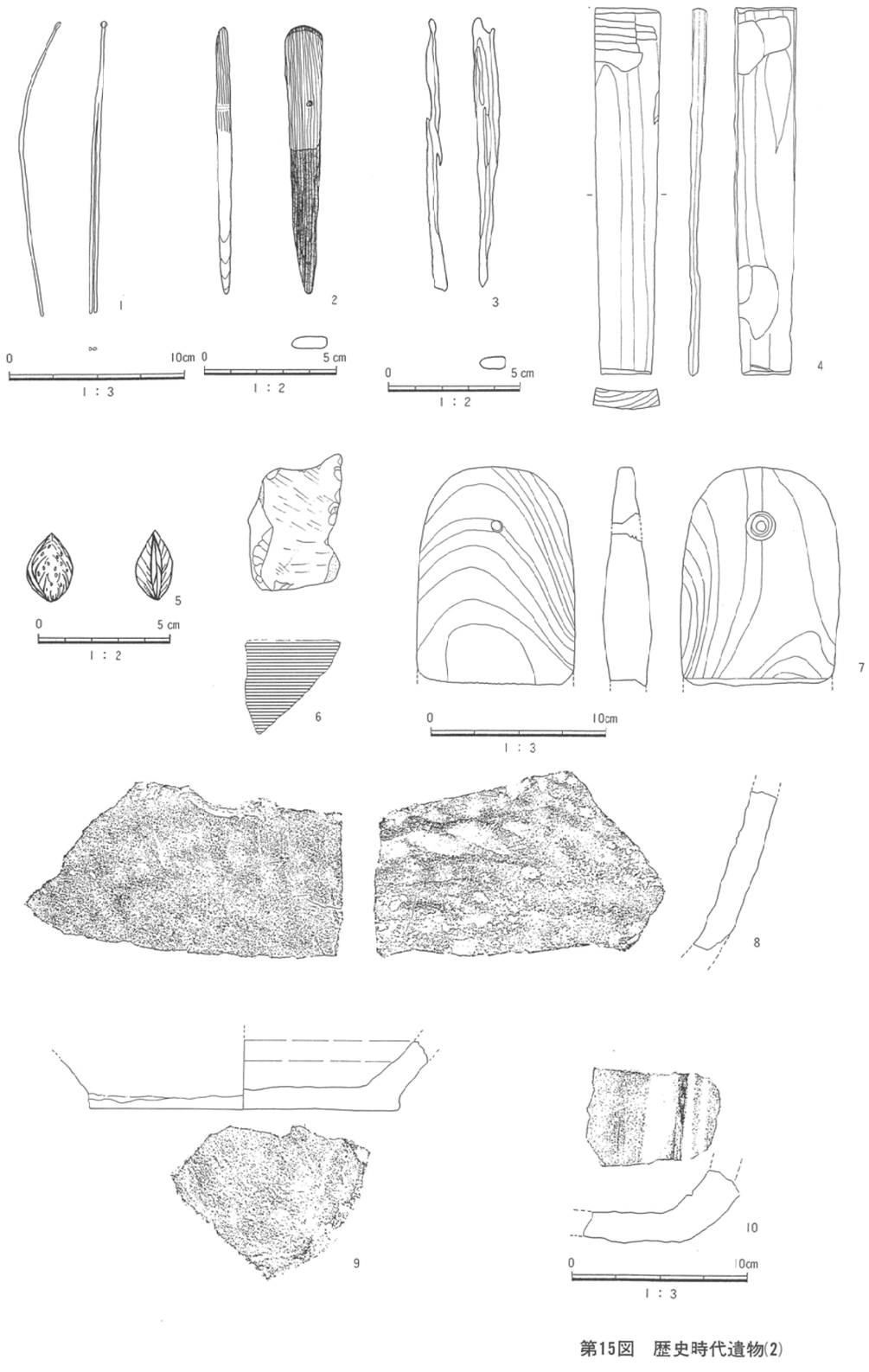
S K 5 土層註記
F 1　7.5Y　3/1オリーブ黒色微砂（遺物を含む）
F 2　7.5Y　3/2オリーブ黒色微砂

S K 15土層註記
F 1　7.5Y　3/1オリーブ黒色微砂（遺物を含む）
F 2　7.5Y　3/2オリーブ黒色微砂

第13図　溝跡・土壙



第14図　歴史時代遺物(1)



第15図　歴史時代遺物(2)

表３　遺構観察表(２)

遺構番号	種　別	検出地区(X－Y)G他	平面(断面)形	主軸方位	規　模 (NS×EW)m	備　考
SD 1	溝　跡	(3･4－1･2)G	(鍋底形)	N－ 2°00'－E	2.20×2.55	第13図 「岐」墨書土器
SD 2	溝　跡	(5～7－1.2)G	(U字形)	N－ 4°00'－E	1.05×0.29	第５図
SD 3	溝　跡	(4･5－1.2)G	(逆台形)	N－ 0°00'－E	2.11×0.28	第５図
SK 4	土　壙	(4･5－2)G	円　形		(0.60)×1.98	第５図
SK 5	土　壙	(2－1)G	不整方形	N-22°00'-E	0.91×0.87	第13図
SK 6	土　壙	(1－1)G	不整円形		0.62×0.70	第13図
SD11	溝　跡	(11･12－1)G	(逆台形)	N-13°10'-W	1.09×0.27	第５図
SD13	溝　跡	(12･13－1)G	(逆台形)		0.78×0.73	第５図
SD14	溝　跡	(16－1)G	(逆台形)	N-69°00'-E	0.56×(0.93)	第５図
SK15	土　壙	(21－1)G	円　形		(0.51)×1.18	第13図
SK16	土　壙	(24－1)G	不整円形		(1.20)×1.50	第５図
SD18	溝　跡	(29･30－1)G	(逆台形)	N-12°10'-W	(1.58)×0.21	第５図
SD19	溝　跡	(32･33－1)G	(鍋底状)	N－ 4°50'-W	(0.84)×0.32	第５図
SK20	土　壙	(34･35－1･2)G	不整楕円形		(1.31)×3.11	第５図
SD21	溝　跡	(35･36－1)G	(鍋底状)	N-11°10'-W	(1.08)×0.16	第５図
SD22	溝　跡	(36－1･2)G	(U字形)	N－ 3°50'-W	(1.70)×0.22	第５図
SD23	溝　跡	(37－1)G	(U字形)	N-31°30'-W	(1.82)×0.34	第５図
SD26	溝　跡	(38･39－1)G	(逆台形)	N-73°50'-E	0.46×(1.62)	第５図
SD32	溝　跡	(45－1･2)G	(鍋底形)		(0.42)×0.30	第５図
SD33	溝　跡	(45－1･2)G	(逆台形)		(0.67)×0.31	第５図
SB34	掘立柱建物跡	(8～12－47～51)G	長方形	N-10°50'-W	7.68×(5.40)	第11図　３間×１間以上
SD35	溝　跡	(12～16－39～44)G	(U字形)	N-12°50'-W	(10.38)×1.44	
SD38	溝　跡	(8･9－33)G	(U字形)	N－ 0°20'-E	(1.40)×0.44	
SB39	掘立柱建物跡	(12～15－54～56)G	長方形	N-17°40'-E	(4.41)×5.52	第12図　３間×２間以上
SD40	溝　跡	(6～16－33～35)G	(鍋底形)	E-18°10'-N	4.50×(19.50)	第13図
SB43	掘立柱建物跡	(10～13－42～44)G	長方形	N-21°00'-E	(3.60)×(6.00)	第４図　２間×２間以上
SD50	溝　跡	(9～16－37･38)G	(U字形)	E-17°50'-N	2.63×(14.50)	第４図
SD51	溝　跡	(9･10－49)G	(U字形)	E-19°20'-N	0.26×(2.94)	
SD52	溝　跡	(6～8－33～37)G	(鍋底形)	N-13°20'-E	(8.40)×4.75	第４図
SD60	溝　跡	(8～16－50～52)G	(U字形)	E-17°30'-N	1.86×(15.15)	第13図
SD61	溝　跡	(9･10－52～56)G	(U字形)	N-15°30'-E	(7.50)×1.85	
SK71	土　壙	(11－36･37)G	楕円形		1.26×1.02	

表４　遺物観察表（２）

挿図番号	図版頁	器種	出土位置	法量（cm）			調整		底部形態	分類	備考
				口径	底径	器高	外面	内面			
14-1	9	須恵器高坏	ＳD1－F1	(13.0)	8.4	(4.6)	ロクロ痕	ロクロ痕	平底	Ｇａ	ヘラ切り
14-2	9	須恵器坏	ＳD1－F1	(12.8)	(8.7)	(2.1)	ロクロ痕		平底	Ｆａ	ヘラ切り
14-3	9	赤焼土器坏	ＳD1－F2	12.8	4.8	4.1	ロクロ痕	ロクロ痕	平底	Ｎｂ	糸切り
14-4	9	須恵器坏	ＳD1－F2	14.0	5.6	4.3	ロクロ痕	ロクロ痕	平底	Ｆｂ	糸切り・「岐」墨書
14-5	9	須恵器坏	ＳD1－F2	(11.2)	8.4	(1.3)	カキ目	ロクロ痕	平底	Ｆａ	ヘラ切り
14-6	9	須恵器蓋	ＳD1－F2	(13.4)	(14.0)	(3.9)	ロクロ痕	ロクロ痕	丸底	Ｇａ	回転ヘラ切り
14-7	9	赤焼土器坏	ＳD1－F3	(12.5)	5.5	4.4	ロクロ痕	ロクロ痕	平底	Ｎｂ	糸切り
14-8	9	赤焼土器坏	ＳD2－F2	(11.2)	5.2	(3.2)		ロクロ痕	平底	Ｎｂ	糸切り
14-9	9	須恵器坏	ＳD13－F	(11.2)	5.8	(3.4)	ロクロ痕	ロクロ痕	平底	Ｆｂ	糸切り
14-10	9	須恵器坏	ＳD13－Y	(13.0)	(8.0)	3.0	ロクロ痕	ロクロ痕	平底	Ｆａ	ヘラ切り
14-11	9	須恵器坏	1－1－II	(13.4)		(4.0)	ロクロ痕	ロクロ痕	平底(?)	Ｆｂ	「岐」墨書
14-12	9	須恵器坏	6－45－IIｂ	(13.0)		(9.9)	ロクロ痕	ロクロ痕	平底(?)	Ｆｂ	「大」墨書
14-13	9	赤焼土器鍋	ＳD2－F3	39.4		(6.6)	ロクロ痕	ロクロ痕		Ｏ	
14-14	9	須恵器蓋	ＳD72－F2	14.0		(1.4)	ロクロ痕	ロクロ痕		Ｇｂ	
14-15	9	須恵器蓋	ＳD1－F1	(14.4)		(1.2)	ロクロ痕	ロクロ痕		Ｇｂ	
14-16	9	須恵器蓋	ＳK4－F1	(19.3)		(3.4)	ロクロ痕	ロクロ痕		Ｇｂ	
14-17	9	須恵器甕	ＳD60－F1	(22.6)	24.8	7.2	ロクロ痕	ロクロ痕		Ｉ	
15-1	10	銅製品簪	ＳD1－F1	長さ 16.5	幅 0.4	厚さ 0.2					
15-2	10	木製品斎櫛	1－21－II	〃 10.1	〃 1.3	〃 0.5	焼痕	焼痕			
15-3	10	板状木製品	ＳD－2－F2	〃 10.2	〃 0.9	〃 0.4	削り	削り			杉材
15-4	10	木桶側板	10－52－I	〃 20.6	〃 3.5	〃 1.0	削り	削り			
15-5	10	果核	1－33－II	〃 2.6	〃 1.8	〃 1.4					桃
15-6	10	砥石	10－57－I	〃 6.7	〃 3.8	〃 5.2	研磨痕	自然石面			
15-7	10	下駄	10－52－I	〃 12.3	〃 8.8	〃 2.6	削り	削り			
15-8	10	中世陶器甕	ＳD61－F3	(15.0)	(9.2)	1.5	ミガキ	アテ痕			
15-9	10	中世陶器甕	ＳD61－F3	(20.8)	(15.6)	1.7		アテ痕	平底		
15-10	10	陶器火箱	ＳD60－F1			2.3	タタキ	ロクロ痕	平底		

IV　まとめ

1　遺構について

今回の調査によって五百刈遺跡からは、古墳時代の竪穴住居跡４棟、落ち込み遺構４基、土壙４基、溝跡２条、平安時代の建物跡３棟、土壙７基、溝跡22条等が検出された。

当初、五百刈遺跡の時期は平安時代と考えられていたが、平安時代の地層（III層）の下に間層（IVａ層）を挟んでさらに古墳時代の地層が推積していることが判明した。古墳時代の遺物は、次節で述べるように６世紀代を主とするが、これより古い５世紀代の土器も破片で出土しており、今後この時期の住居跡が発見される可能性もある。

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡と落ち込み遺構・溝跡・土壙等があり、本調査区の畑地部分から主として検出された。この時期の集落は、現地形や第１図の周辺低地微地形分類からみて、当時の微高地に並ぶ可能性が高い。微高地以外の低地分には水田の存在も考えられる。

４棟の竪穴住居跡のうち２棟は西側が未検出となっているが、平面形は方形を基本として長軸の長さは3.5～5.5mを測る。炉やカマドは検出されなかった。遺構検出面から床面までの高さは12～17cmである。床面は比較的安定しているが、顕著な貼床は認められない。主たる柱穴の配置は、ＳＴ49住居跡の例からみて４本柱を基本とすると考えられる。

住居跡の主軸方位は、ＳＴ36・49住居跡とＳＸ73が磁北に対し３～６度西、ＳＴ70住居跡が約10度西、ＳＴ66住居跡が約43度東に傾く。

ＳＸとした４基の落ち込み遺構は、竪穴住居跡の可能性があるものの、底面が波打っており、壁面も一部を除き明確ではない。性格については不明な点が多いが、土壙の大きなものや遺物包含層の自然的な落ち込み等が考えられる。

土壙のうちＳＫ74土壙については、坏を一括して廃棄した祭祀的な性格が考えられる。

平安時代の遺構は、掘立柱建物跡と土壙・溝跡等が本調査区北半と排水路地区から主として検出された。古墳時代に比較して、集落の範囲がさらに広がるようである。

掘立柱建物跡のうちＳＢ39建物跡は３間×２間以上の規模で、さらに北側に延びると思われる。中柱となる柱穴の存在を考慮すれば、床敷の建物跡ないし倉庫跡が考えられる。これを囲むようにＳＤ60・61大溝が巡り、その中にはＳＢ39建物跡以外にも数棟の建物跡の存在が予測される。ＳＢ34建物跡は３間×２間以上の規模で、さらに東側に延びると思われる。ＳＢ43建物跡は２間×２間以上の規模で、柱穴が５個Ｌ字形に検出されている。

本調査区からは、この他にＳＤ40・50・52等の東西ないし南北方向の幅３mを超す大溝が検出されている。これらの大溝からは古墳時代や平安時代の遺物が出土しているものの中世や近世の陶磁器も出土しており、平安時代とは関係ない後世の大溝と考えられる。

土壙や幅30cm前後の溝跡は、排水路地区からまとまって検出された。線的な遺構の検出に止まっているが、近くに建物跡が発見される可能性がある。なお、今回の調査区は遺跡の北端にあたり、五百刈遺跡の中心部はさらに南側や東側に広く延びるものと思われる。

2　遺物について

本遺跡からは、古墳時代や平安時代の土器・石器等が整理箱にして11箱分出土した。

古墳時代の遺物は、土師器が大部分で、古墳時代と推定できる須恵器は認められない。

土師器には、坏（A）・高坏（B）・鉢（C）・甕（D）・壺（E）がある。

坏は内外が丁寧に磨かれ、内面に黒色化処理が施されているもの（内黒）と、黒色化処理が施されていないもの（非内黒）の二者がある。数量的には前者が多い。器形や整形技法等から、Ⅰ類：丸底で体部が丸味をもち、口縁部で軽く外反するもの(第９図３)、II類：丸底で体部が丸味をもち、口縁部が上の方で外反するもの（同図１･11)、III類：丸底で体部中程に段を有し、口縁部がやや長く引き出されるもの（同図４･10)、IV類：平底気味で体部が直線的に立ち上がり、口縁部が軽く外反するもの（同図６･12)、V類：平底で体部が丸味をもち、口縁部が上の方で外反するもの（同図７・９）に分けられる。

高坏も内外が丁寧に磨かれ、内黒と非内黒の二者がある。坏部と接続するものがないため、脚部の形態や整形技法から、Ⅰ類：低い脚部がハ字状に開くもの（第９図14･18)、II類：筒状の脚部が下半部で八字状に開くもの（同図17･20･21)、III類：低い直線的な高台がつくもの（同図18）の３類に分けられる。第９図10も高坏になるかもしれない。

鉢は平底で口縁部が軽く外反し、内外に刷毛目を有するもの（第10図９）が１点ある。

甕は外面ないし内外面に刷毛目を有する長胴のもので、底部は平底と丸底がある。口縁部の形態や器形から、Ⅰ類：口縁部が強く屈曲するもの（第９図13･19)、II類：口縁部がく字状に外反するもの（第９図16･第10図２)、III類：口縁部が直線的に立上がるもの（第10図３・８・10）の３類がある。壺は器形が復元出来るものがなかった。

五百刈遺跡の古墳時代の土器群は、庄内地方では鶴岡市助作遺跡ＳＴ９住居跡や同矢馳Ａ遺跡ＳＴ13住居跡の土器群と類似する。時期は古墳時代中期６世紀中頃と推定される。

平安時代の遺物は、土師器・須恵器・赤焼土器の三種の土器と砥石・木製品等がある。

須恵器の器種には坏（F)・高坏（G)・蓋（H)・甕（Ⅰ)・壺（J)、土師器の器種には坏（K)・甕（L)・壺（M)、赤焼土器の器種には坏（N)・鍋（O)・甕（P）等がある。

須恵器の坏と高坏は、底部の切り放しがヘラ切り（第14図１・２・５･10）と糸切り（同14図４・９）があり、器形は器高に比しての底径がやや大きいもの(a)とやや小さいもの(b)の二種がある。須恵器蓋は、(a)壺の外蓋（同図６）と(b)短い返しが付くもの（同14～16）がある。赤焼土器坏の底部の切り離しは、すべて糸切りである。以上のことから、これらの土器群の時期は、平安時代前半９世紀後半頃と推定される。

参考文献

阿部明彦他『鶴岡西部地区遺跡群　矢馳Ａ遺跡・矢馳Ｂ遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第127集　山形県・山形県教育委員会　1988年

阿部明彦『庄内平野の古墳時代史－山形県庄内地方出土の土師式土器を中心として』加藤稔還暦記念論文集所収　1992年

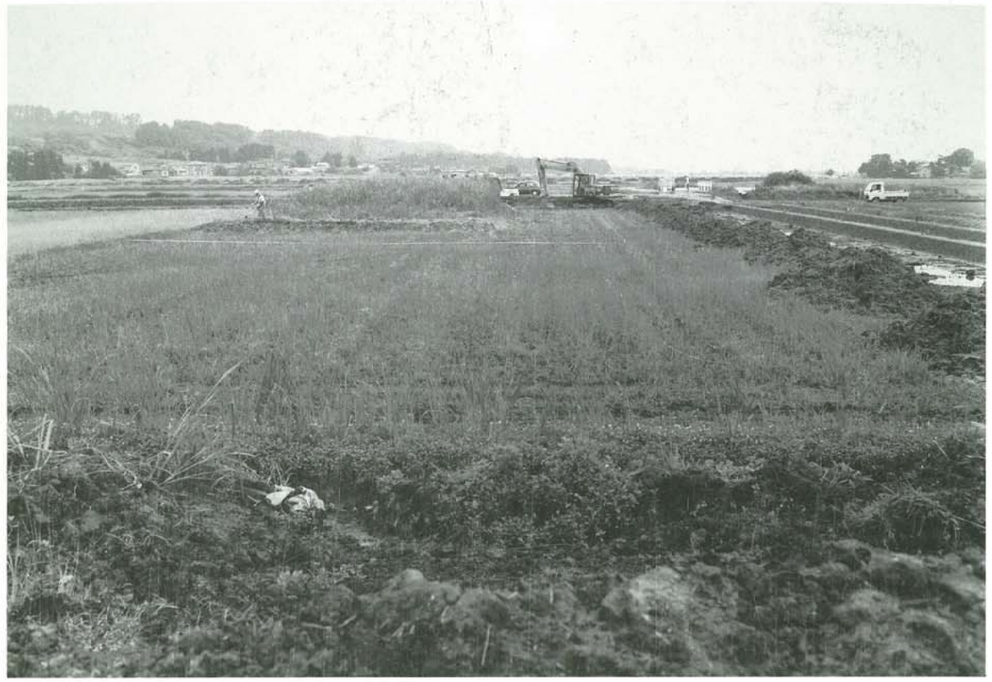
報告書抄録

ふりがな	ごひゃくがりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	五百刈遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	佐藤庄一・飯塚　稔
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番１号　Tel 0236－72－5301
発行月日	西暦 1994年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ごひゃくがり 五百刈	やまがたけんつるおかし 山形県鶴岡市 おおあざしもかわ 大字下川 あざごひゃくがり 字五百刈	6203	平成３年度 登録	38度 46分 29秒	139度 47分 20秒	19930726～ 19930825	1,000	県営ほ場 整備事業

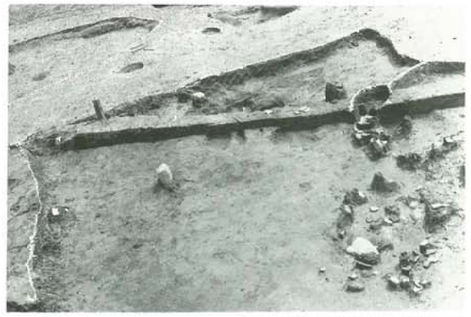
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
五百刈	集落跡	古墳時代 中期	竪穴住居跡　4棟 土壙　13基 溝　4条 その他　落ち込み・柱穴など	土師器、石製紡錘車 土製丸玉	平安時代の遺構面の下層に間層を伴って古墳時代中期の遺構を検出
		平安時代 前半	掘立柱建物　3棟 土壙　6基 溝　17条 その他　落ち込み・柱穴など	土師器、須恵器 赤焼土器、砥石 木製品（下駄、桶側板）	

図　版



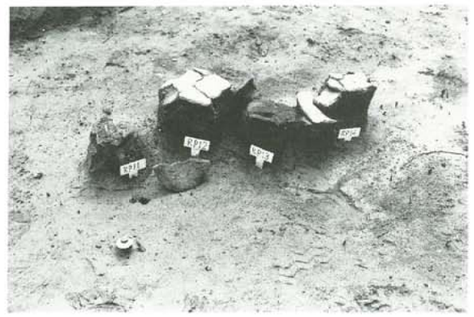
発掘調査前の状況（北から）

本調査区発掘調査状況（南から）



ＳＴ36住居跡近景

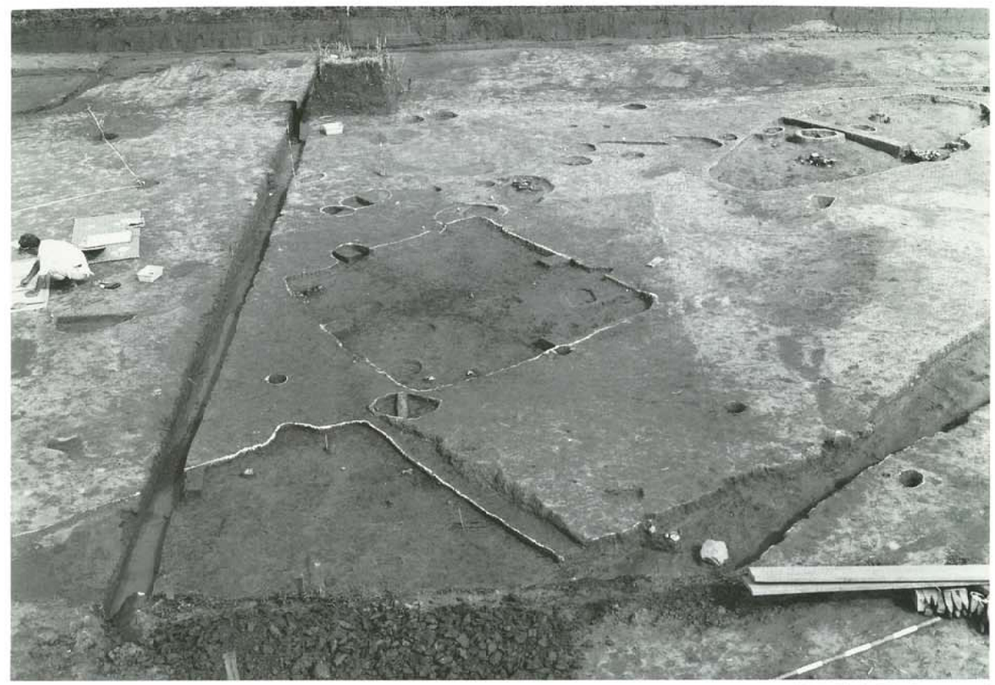
ＳＤ72溝跡近景



ＳＸ48遺物出土状況

ＳＫ74遺物出土状況

ＳＴ49住居跡（西から）



ＳＴ49住居跡全景（西から）

ＳＴ70住居跡全景（北東から）

図版 4

東壁土層断面（西から）

中央土層断面（北から）

南壁土層断面（北から）

図版 5

9－1

9－2

9－3

9－4

9－5

9－6

9－7

9－8

9－9

9－10

9－11

9－12

9－13

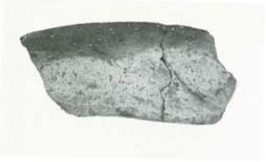
9－14

9－15

9－16

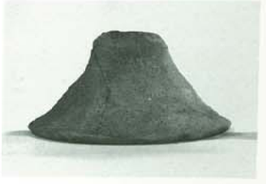
9－17

9－18



9－19

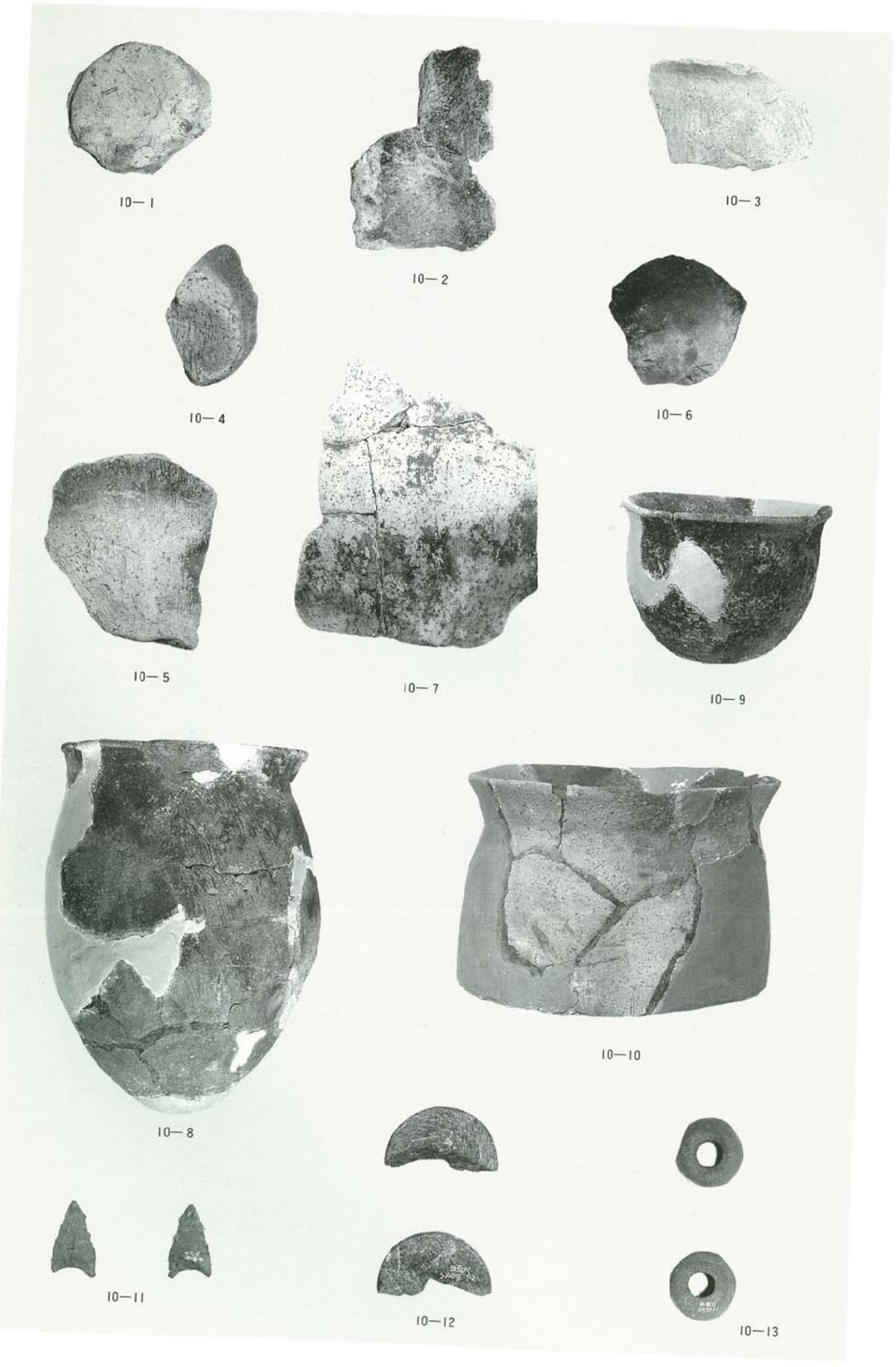
9－20



9－21

古墳時代等出土遺物（1）

図版 6



古墳時代等出土遺物（2）

図版 7

ＳＢ39建物跡全景（南西から）

ＳＢ34・39建物跡遠景

ＳＤ40大溝断面

ＳＤ50大溝断面

ＳＤ１溝跡遺物出土状況

ＳＤ１溝跡土器出土状況

排水路立会地区全景（東から）

14－１

14－２

14－３

14－４

14－５

14－６

14－７

14－８

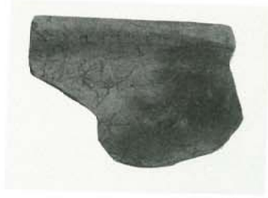
14－９

14－10

14－11

14－12

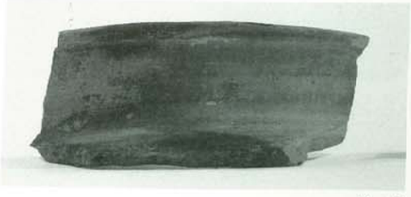
14－14



14－13

14－15

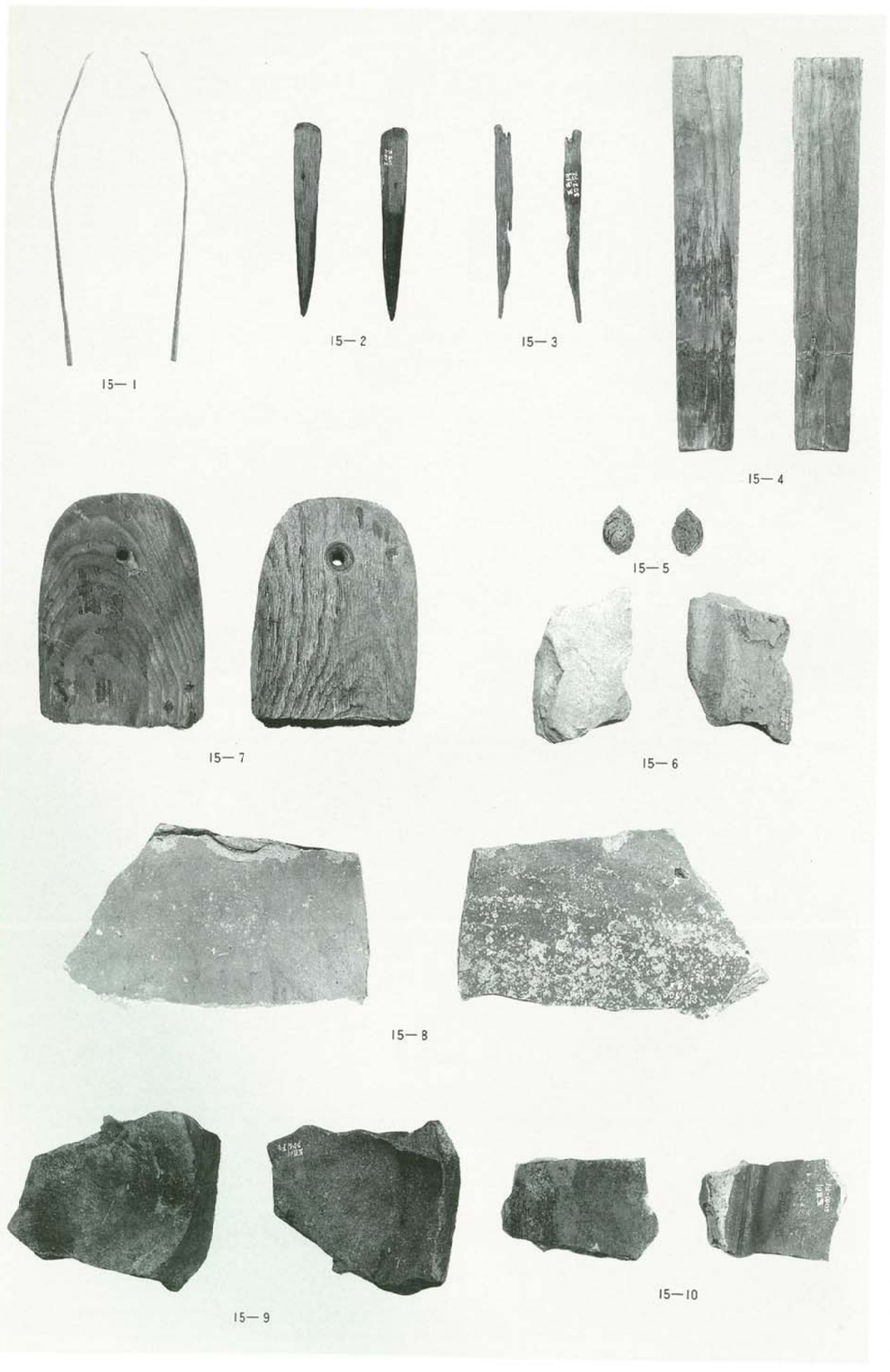
14－16



14－17

歴史時代出土遺物（１）

図版10



歴史時代出土遺物（2）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

五百刈（ごひゃくがり）遺跡発掘調査報告書

１９９４年３月３１日　発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999—31　山形県上山市弁天二丁目１５番１号
電話　０２３６—７２—５３０１
印刷　大場印刷株式会社

1995－1174